

国際医療福祉大学審査学位論文（博士）
大学院医療福祉学研究科博士課程

文化心理学の視座から見た
日本人米国駐在員妻の異文化受容プロセス

2019 年度

保健医療学専攻・臨床心理学分野
氏名：皆川久仁子

文化心理学の視座から見た
日本人米国駐在員妻の異文化受容プロセス

皆川久仁子

要旨

米国の心理支援分野では、人種の多様化に対応した多文化カウンセリングが導入された。日本でも、外国人労働者や外国から帰国した日本人が増加し、多文化理解能力を備えたカウンセラーを求める声が高まっている。

異文化接触者の文化的世界観を理解することを目標に、米国滞在の経験を持つ日本人駐在員妻7人にナラティブ・インタビューを実施した。日本人駐在員妻が米国滞在中体験した葛藤の文化的・社会的・歴史的意味と米国文化受容に至るプロセスを、文化心理学の視座から分析した。

その結果、日本人米国駐在員妻の葛藤とは、自文化維持と滞在国文化同化のせめぎ合いであり、その背景には日米の文化・社会・歴史の相違があることが理解できた。また、日本人駐在員妻が米国文化受容に至るプロセスに統一性はなく、一人一人異なるが、最後は全員が「日本文化維持～日米文化統合～米国文化同化」という幅の広い収束地帯にたどり着いたことが解明できた。

キーワード： 日本人米国駐在員妻，文化心理学，異文化受容プロセス

Process of cross-cultural acceptance of Japanese expatriate spouses in the US, studied through the
view of cultural psychology

Kuniko Minakawa

Abstract

Cultural competency practices have been adopted in the mental health field in the United States because of the disparities in the quality of services delivered to ethnic minority groups. The necessity of adopting cultural competency practices in the Japanese mental health field is inevitable because of the increasing number of immigrants in Japan and returnees from foreign countries.

The purposes of this study are to investigate the cultural meanings of conflicts people face when they have continuous contact with a different culture, and to illustrate the process of cross-cultural acceptance. The narrative interview was conducted with seven Japanese expatriate spouses who have lived in the U.S. for more than five years. Their narratives were analyzed through the view of cultural psychology.

The results showed that their conflicts root from the cultural disparity of the two countries. They also showed that each participant's process of cross-cultural acceptance is different, but they all reached the same goal, which is a wide integration area of two cultures.

Key words: Japanese expatriate spouses, cultural psychology, process of cross-cultural acceptance

目次

第 1 章 序論	
1. 背景, 問題.....	1
1.1 米国の多文化心理支援.....	1
1.2 日本の心理支援.....	2
第 2 章 異文化接触に関する理論	6
1. Berry の心理的文化変容.....	6
2. Oberg の U 字カーブモデルと W 字カーブモデル.....	7
3. 文化心理学.....	8
4. 集団主義と個人主義.....	9
5. 用語の説明.....	9
第 3 章 先行研究	10
第 4 章 研究目的	13
第 5 章 倫理的配慮	14
第 6 章 研究方法	15
1. 研究協力者の選定基準とサンプリング.....	15
2. 質的研究を用いる理由.....	16
3. ナラティブ・インタビュー.....	16
4. 複線径路等至性アプローチ.....	18
4.1 用語の説明.....	18
4.2 分析の手順.....	19
第 7 章 研究結果	21
1. 研究協力者のプロフィール.....	21
2. 複線径路等至性モデル: 5 ステージの設定.....	23
3. 各ステージの課題と葛藤.....	25

4. ステージ 1: 海外赴任を決意するまで.....	26
4.1 積極的米国赴任.....	27
4.2 消極的米国赴任.....	29
5. ステージ 2: 子供の教育選び.....	31
5.1 現地校.....	33
5.2 日本人学校→現地校.....	34
5.3 日本人学校←→現地校.....	34
5.4 子供の年齢.....	34
5.5 子供の選択.....	35
6. ステージ 3: 夫からのサポート.....	36
6.1 夫からのサポートあり.....	37
6.2 夫からのサポートなし.....	38
6.3 妻が夫をサポート.....	39
7. ステージ 4: 自分の居場所探し.....	42
7.1 米国人コミュニティ.....	43
7.2 日本人コミュニティ.....	46
8. ステージ 5: 帰国後・夫の定年後.....	48
8.1 米国文化を受容.....	49
8.2 リエントリー・ショック.....	54
8.3 日本文化を見直す.....	54
第 8 章 考察.....	56
1. ステージ 1 米国赴任を決意する.....	56
1.1 親の介護.....	56
1.2 過去の成功体験, 海外生活体験.....	58
1.3 選択権.....	59

2. ステージ 2 子供の教育の選択.....	59
2.1 状況に合わせて柔軟に変える.....	59
2.2 子供の選択を尊重する.....	61
3. ステージ 3 夫からのサポート – 性別役割分担 –.....	62
3.1 性別役割分担の現状.....	62
3.2 海外駐在員の夫婦ダイナミックス.....	62
3.3 夫からの解放.....	63
3.4 妻の自立.....	64
3.5 性別役割分担の積極的受容.....	65
4. ステージ 4 自分の居場所を見つける.....	66
4.1 日本人コミュニティ.....	67
4.2 多国籍コミュニティ.....	68
4.3 分離と同化.....	68
5. ステージ 5 帰国後・夫の定年後.....	69
5.1 米国の良いところを取り込む.....	70
5.2 日本の良いところを発見する.....	71
5.3 日米文化の特徴.....	71
第 9 章 総合考察.....	73
1. 葛藤の文化的・社会的・歴史的意味.....	73
2. 一人一人異なる滞在国文化受容のプロセス.....	74
3. 日米文化の融合地帯.....	76
第 10 章 結語.....	78
謝辞.....	81
引用文献.....	82
添付資料 参照図 1~12.....	88

第1章 序論

1. 背景, 問題

1.1 米国の多文化心理支援

1960年代から始まった経済のグローバル化の影響で、物質も人もすばやく国境を越えて移動するようになった。2015年の世界の移民数は2億4400万人に上り、世界人口73億人の30人に1人が移民となって外国に移住している計算になる¹⁾。また、自国の厳しい政治事情の為に安全を求めて他国へ避難する難民の数も増え、2017年の難民数は6900万人と推測された²⁾。大量の人間流動の結果、地球上の至る所で文化が混じり合うようになった。

人間の流動は多くの国に影響を与えた。中でも移民受け入れ数世界1位の米国が受けた影響は大きく、米国の総人口は2000年の2.8億人から10年間で3.1億人に増加した³⁾。米国の人口増加の大部分を占めたのはヒスパニック・ラテン系人種で、2000年の3.5千万人から2010年には5千万人に増えた^{同上)}。次に増加が多かったのはアジア系人種で、2000年の1千万人から2010年には1.5千万人に増えた^{同上)}。2014年の米国の人種の割合は白人62.2%、ヒスパニック・ラテン系17.4%、黒人・アフリカンアメリカン12.4%、アジア系5.2%であったが、今後も同じ勢いで移民が増え続ければ、2060年には白人の割合は43.6%に下がり、反対に今日マイノリティの立場にいる人種を総合すると白人の割合を上回ると予測されている⁴⁾。

米国の心理支援分野は、人種の多様化に敏感に反応した。1970年代、カウンセリングに多文化的意識・知識・技術 (multicultural awareness, knowledge, and skills)を導入する必要性を訴える声が挙がった⁵⁾。Sueらカウンセリング心理学者は、「今日の心理支援の基礎となっている心理学の概念や理論は、かつて欧米人によって開発されたものであり、それを文化が多様化している今日の米国人の心理支援に適用するには限界がある」、「心理支援従事者の大多数は白人が占めており(白人86%、アジア系5%、黒人・アフリカ系4%、

ヒスパニック系 5%⁶⁾) , 今日の米国の人種の割合に対応していない」と主張し、多文化カウンセリングの必要性を訴えた⁶⁾。多文化カウンセリングとは、異なる文化的背景を持つ人に対する援助、あるいは異文化接触下にある人に対する援助など、カウンセリングにおける文化の影響について注目するアプローチであり、個人の文化的価値に合致した目標に向けて文化的に適切なアセスメント方法と介入方略を用いる心理援助である。Sue らは、「多文化カウンセリング能力 (Multicultural Counseling Competencies, 以下 MCC)」を①己の文化的価値や文化的アイデンティティについての気づき、②クライアントの文化的世界観の認識、③クライアントの背景にある文化に配慮した介入方法を提供するスキルと捉え、カウンセラーの職能の一部として位置付け、専門家養成のカリキュラムに導入するよう働きかけた⁷⁾。2003 年、米国心理学会(American Psychological Association)は、「心理学者のための多文化間教育・訓練・研究・実践・組織変容に関するガイドライン (Multicultural Guidelines)」を倫理綱領に織り込むに至った⁸⁾。

カウンセラーを養成する教育機関は、MCC 導入の働きかけに迅速に対応した。1977 年には人種やマイノリティ集団について学ぶコースを必須科目に指定していた米国の大学院は 1%にも満たなかったが、1992 年には 89%に増え⁹⁾、2002 年以降は、カウンセラーを養成するほぼ全ての大学院・教育機関で必須科目として加えられた¹⁰⁾。このムーブメントの勢いは研究論文の数にも表れ、Journal of Counseling Psychology に限定した調査ではあるが、1954 年から 2009 年の間に発行された全論文 3,717 本中、多文化に関する論文は 1202 本にも上った¹¹⁾。人種・民族に関するものは 227 本で、内訳は 1950 年代 1 本、1960 年代 4 本、1970 年代 30 本、1980 年代 41 本、1990 年代 49 本、2000 年代 102 本と、年々増加している^{同上)}。

1.2 日本の心理支援

米国とは規模が違うが、日本にも世界の人口流動の波は押し寄せている。2019 年 4 月、日本政府は日本の労働力不足問題の対応策として、5 年間で最大 34.5 万人の労働移民を

新たに受け入れる制度を施行した。2018年の在日外国人労働者数は146万人（前年比14.2%増）であったが¹²⁾、この新制度を受けて今後さらに増えることが予測される。難民受け入れに消極的な日本だが、過去にはインドシナ三国から逃れてきた難民を1万人以上受け入れたことがある。2017年には19,629人が日本で難民申請を行ない、20人が難民認定を受けた¹³⁾。日本に留学する外国人数も増えている。2003年に「留学生15万人計画」が達成された後、政府は2008年に「日本を世界に開かれた国とし、人の流れを拡大していくために重要である」として「留学生受入れ30万人計画」を打ち出した。その結果、2018年の外国人留学生数は298,980人(対前年比12.0%増)を数えた¹⁴⁾。外国人が多く暮らす地域に住む地域では、人種と文化が多様化している。2015年の時点で最も外国人の割合が大きかったのは大阪市生野区で(21%)¹⁵⁾、5人に1人以上が外国人という計算になる。東京では、新宿区で外国人の割合が多かった(11%)^{同上)}。日本を多文化化しているのは外国人だけではなく、日本を離れて外国で暮らし、再び日本に帰って来る日本人によっても引き起こされる。2017年の在留邦人数は135.2万人（前年比1%増）で、このうち3ヶ月以上海外に在留している長期滞在者数は86.8万人であった¹⁶⁾。長期滞在者の中には、日本の企業から派遣された海外駐在員とその家族、海外の教育機関で学ぶ留学生も含まれており、彼らは3ヶ月以上の外国生活の後、日本に帰って来ることが想定されている。日本の多文化化にすばやく対応したのは、グローバル企業であった。社内で使う言語を英語にし、食堂でハラール・フードを提供し、イスラム教信者の為に祈りの部屋を設け、ダイバシティ委員会を設置するなど、世界各地から集まる人々に対して多文化に配慮した (culturally sensitive) 対応をとった。外国人住人が多い地域の市役所や区役所でも、「多文化共生」と銘打ち、多言語に翻訳したパンフレットを用意する、外国語を話す職員を置くなど、多文化に配慮したサービスを提供するようになった。

日本の心理支援分野に目を向けると、一般社団法人日本臨床心理士会が倫理綱領第1条基本的倫理で、「会員は、基本的人権を尊重し、人種、宗教、性別、思想及び信条等て人を差別したり、嫌がらせを行ったり、自らの価値観を強制しない」と謳っている¹⁷⁾。研

究分野では、心理臨床学研究 1 巻から 28 巻が発行された 30 年間で掲載された全論文 1101 本のうち民族的マイノリティを対象とした論文は 9 本であった¹¹⁾。カウンセリング分野では在日外国人が日本人カウンセラーを訪れる緊急性は低いですが、精神医療分野では緊急治療を求めて精神科医を訪れる在日外国人は少なくなく、多文化間精神医学会が発行する学会誌「こころと文化」では、民族的マイノリティや在留邦人のメンタル・ヘルスに関する研究が多く発表されている¹¹⁾。

日本では今後外国人労働者や、外国生活を終えて帰国する邦人が増え、人種も文化も多様化し、個々人の背景にある文化に配慮した多文化カウンセリングの必要性は高まることが予想される。心理支援分野では、個々人の歴史的・文化的・社会的背景を理解し、多文化に配慮することが、正確な査定、解釈、支援につながる。例えば、「アフリカからの難民」と言っても、アフリカは国によって言語・宗教・政治事情・経済事情は異なり、日本に逃れて来た理由や経緯、日本で置かれている状況などは一人一人状況が異なるので、個々人の文化的価値観に合致したアセスメントと介入が必要となる。また、「帰国子女」と言っても、どこの国で、何歳の時、何年間滞在し、何語で教育を受け、どのような友人と交流し、帰国してからどのような教育を受けているかなど一人一人異なるので、「帰国子女」と一つのカテゴリーとして括ることは過ちを招く。多文化への深く広い理解がなければ、心理支援者は自文化中心主義 (ethnocentrism) に陥り、クライアントを平易にステレオタイプ化し、かえってクライアントを苦しめることになる。

心理支援が「文化理解能力(cultural competency)」を身につける為には、どうすれば良いのか。それには、先を走っている米国から学ぶ必要がある。まず、MCC で提唱されている柱の 1 つ、「己の文化的アイデンティティを認識する」為には、米国の学生は具体的にどのように学んでいるのか。米国 Ohio University の Multicultural counseling コースを一例にとると、学生は自分の文化的アイデンティティの歴史と経緯を自己分析する課題を与えられる。自分の文化的価値を認識することで、心理支援の場において自文化中心主義に陥る危険性を認識する¹⁸⁾。2 本目の柱、「クライアントの文化的世界観を知る」為

に、同大学同コースを例にとると、学生はグループごとに異文化に関連するケース・スタディに取り組む^{同上}。学生たちはクライアントが持つ文化的背景や、クライアントが抱えている問題に文化的背景が与えている影響などについて、グループで討議する^{同上}。さらに、問題解決の為に活用出来る地域サービスを訪ね、それらがクライアントに提供するのに相応しいかをグループで討議する^{同上}。最後は、結果をグループ発表することで、他のグループと情報をお互いにシェアすることができる^{同上}。3本目の柱、「クライアントの背景にある文化に配慮した介入方法を適用する」については、現在米国の心理学者やカウンセリング心理学者が、どの介入方法がどの文化・どの人種の人に有効かについて研究を重ね、エビデンスやデータを集めている。米国の取り組みを参考にし、日本でも心理支援者が多文化理解能力を高めることが出来れば、日本独自の「多文化カウンセリング能力」の導入が進められると考える。

第2章 異文化接触に関する理論

1. Berry の心理的文化変容

人類学者 Redfield, Linton & Herskovits は、異なる文化を持つ集団が直接的、継続的に接触した結果、双方あるいはいずれかの集団の文化的パターンが変化する現象を「文化変容」(acculturation)と定義した¹⁹⁾。比較文化心理学者 Berry は、異文化接触を経験する個人の文化的態度、価値観、行為の変化を心理的文化変容(psychological acculturation)と呼び、個人が受け入れ集団に向かって文化変容する際経験するストレス・レベルや心理的・文化的適合レベルにより統合(integration)、同化(assimilation)、分離(separation)、疎外化(marginalization)の4つの文化変容戦略(acculturation strategies)に分類した²⁰⁾。統合は「自文化を維持しつつ滞在国の文化も摂取する」、同化は「自文化を捨てて滞在国の文化に適応する」、分離は「自文化を維持し、滞在国文化との接触を積極的に回避する」、疎外化は「自国・滞在国どちらの文化とも距離を置く」ことを意味する。「統合」は最も異文化適応(adjustment)状態(高い自尊感情、低い抑鬱など)と関連すると考えられ、年齢・性別・言語・滞在期間・赴任目的・教育水準・居場所・滞在国の文化構造・ソーシャル・サポートの有無など、様々な独立変数と組み合わせて、適応・不適応の予測検討が重ねられてきた^{21,22)}。

しかし、この4分類は「伝統的文化は価値があり、保持されるべきか」、「より大きな社会との前向きな関係は求められるべきか」の2つの質問に対してYes/Noのどちらかで答え、2×2の4つのセルのいずれか分類するシンプルな方法であり、そこには回答者の繊細な心理は反映されていないと筆者は考える。2つの質問に答え、例えば「統合」に分類されても、それが「最も異文化に適応した状態」と判断してよいのかという疑問が残る。さらに、研究の礎となっているのは、欧米人学者が欧米人の心に基づいて構築した心理学であり、そこに文化的背景の違いは考慮されていない。今日の多様な文化的背景を持った人々に対して、たった2つの質問をして4つのカテゴリーに分類し、

それを基に彼・彼女たちの異文化適応レベルを判断することには疑問がある。欧米以外の人々に適用する妥当性・信頼性は未だ検証されていない。従って、本研究では Berry の異文化適応理論を部分的に活用するが、この異文化適応理論に全面的に則ることは適切ではないと判断した。

2. Oberg の U 字カーブモデルと W 字カーブモデル

人類学者 Oberg は、異文化接触した人が異文化に適応していく過程を、カルチャー・ショック (culture shock) という概念を用い、U 字カーブモデルを構築した²³⁾。カルチャー・ショックとは、異文化に接触した人が感じる違和感からくるショックのことである。Oberg は、異文化接触者は誰でも何らかの形でカルチャー・ショックを感じることを前提とし、徐々に滞在国文化に違和感を感じなくなり、やがて滞在国文化に慣れ親しんで行く過程を、異文化適応プロセスとして理論化した。異文化に最初に接触した第 1 段階「ハネムーン期」は、見るもの聞くもの全てが新鮮で楽しく感じることができる時期、第 2 段階「カルチャー・ショック期」は、新しい文化に敵対心を持ち、異文化をステレオタイプ視する時期、第 3 段階「回復期」は、言語や新環境に慣れ、次第に異文化に適応する時期、第 4 段階「安定期」は、異文化適応がほぼ完成し、ストレスがなくなり、新しい習慣が受け入れられるようになる時期である^{同上)}。この過程を、時間を横軸、適応レベルを縦軸に描いた折れ線グラフで示すと U 字の形をなすことから、U 字カーブモデルと呼ばれている。Oberg はまた、自国に戻った時も同じ経緯を辿るとし、W 字カーブモデルを構築した^{同上)}。帰国後の第 1 段階では全てが懐かしく、楽しい「ハネムーン期」、第 2 段階は、異文化と比較して自国の問題や不合理性などに気づき、異文化の方がよく見えてショックを受ける「リエントリーショック期」(または「逆カルチャーショック期」)、第 3 段階は徐々に自文化と異文化とのバランスのとれた見方ができるようになる「回復期」、第 4 段階は自文化に戻った時のストレスがなくなり、自文化の価値観や行動様式なども受け入れられるようになる「安定期」である^{同上)}。この過

程を折れ線グラフで表し、前記の U 字と並べると W 字の形を成すことから、W 字カーブモデルと呼ばれる。

しかし、渡航が自発的でない異文化接触者、例えば、家族と別れて外国に働きに行く移民、自国の厳しい政治事情から逃れて来た難民、または、親の介護を諦めて夫の海外赴任に同行する妻など、渡航が強制的または受動的な人の場合、果たして「ハネムーン期」や「回復期」を経験するのか、検証されていない。本研究では、Oberg 理論を部分的に採用するが、全面的に採用することは適切ではないと判断した。

3. 文化心理学

1970 年頃から「人間行動に関する心理学は、果たして地球上にいる全ての人間に当てはまるのか」との疑問が高まり、「社会や文化が異なればその影響を受けて発達する心理も異なる」と考えられるようになった²⁴⁻²⁷⁾。「人の心は文化との相互作用なしには存在し得ない」という前提に立ち、文化に基づいた心理機能が検討されるようになった^{同上)}。1990 年代に発展してきた文化心理学は心理学、文化人類学、社会学、言語学などの穏やかな集合体であり、心と文化は相互に補完し合っており、どちらか片方だけでは理解できないという「心と文化の相互構成的認識」を出発点としている^{同上)}。文化心理学では心のプロセスを理解する為に、個々人の属する社会が歴史の流れの中で築き上げてきた文化の意味を理解し、さらにそれがどのように維持されているかを分析する。文化の理解がなければ心のプロセスの確実な推論はできないと、文化心理学者らは主張する²⁶⁾。文化と心の相互構成的認識から見れば、従来普遍と解釈されてきた自己高揚も、感情も、文化によって異なるのである²⁷⁾。近年の米国の多文化カウンセリングのムーブメントは、まさに文化心理学の概念を心理支援に導入することを目指しているのである。本研究では、文化心理学の視座から異文化接触者の心のプロセスを解明する。

4. 集団主義と個人主義

「集団主義と個人主義」の概念は、世界の人類学者・心理学者・社会学者・比較文化心理学者らの間で、人間の行動や心理を理解する指標として用いられている^{28,29)}。「集団主義と個人主義」というレンズを通して世界のレンズを眺めると、日本を含めた東洋文化圏は、「自己と他人とが根本的に結びついている」という信念に基づいており、米国を含む欧米文化圏は、「自己と他人とが互いに切り離されている」という信念に基づいていることが理解できる。Hofstede, Hofstede, Minkov が 50 カ国以上の国々に社員を置く多国籍企業の社員を対象に行ったアンケート調査の結果によれば、日本人は集団主義的傾向が強く、米国人は個人主義的傾向が強いことが明らかにされている³⁰⁾。

日本の文化は何に由来し、どのような推移を経て維持されて来たのか。文化心理学者 Markus & Kitayama は、他者との共感的な関わり方は慈悲を説く仏教に由来し、また、役割や努力を志向する人のあり方は規範や役割を重んじる儒教の教えに起源を持ち、こうした宗教的文脈が日本人の人間関係や生き方に受け継がれているのだと説く²⁷⁾。一方、欧米人の思考は、デカルトをはじめとするヨーロッパ思想家の考えに代表される「個人の合理的思考への信頼」が基盤になっていると説く²⁶⁾。文化を読み解く道具として「集団主義・個人主義」の概念を用いることについては検証され、妥当性が高い³⁰⁾ことから、指標の一つとして本研究で採用する。

5. 用語の説明

本研究では、「適応(adjustment)」という言葉を使わず、「受容(acceptance)」という言葉を用いる。「適応する」は外部的な要因や力によって周囲に合致していく様子を意味する自動詞で、他力的な意味があるが、「受容する」は自分の意思に基づいて選択し、自主的に周囲の状況を受け入れることを意味する他動詞で、そこには自力的な意味がある。本論文では、「異文化受容」を「滞在国の文化を受け入れ、自分の中に取り入れる」という意味で用いる。

第3章 先行研究

日本の海外駐在員の異文化適応についての研究は、高度成長で海外派遣が増えた1990年ごろから始まった。初期の頃は、海外駐在員のストレスや精神健康度など異文化適応に注意が向けられ、産業医らが異文化接触と精神疾患との関連について調査し、海外駐在員や家族に対して異文化ストレスへの警鐘を鳴らした³¹⁻³³⁾。1982年Tungは、「駐在員配偶者の現地適応・不適応は駐在員の仕事の効率や成果に影響を与え、早期帰任の原因にもなりうる」と論じ³⁴⁾、それに応じて2000年代から駐在員妻を対象にした異文化適応や、海外生活への不満・不満足などに研究者の関心が向けられるようになった。三善は、クアラルンプール在住の日本人駐在員妻を対象に調査を実施し、夫の海外転勤に同行することを受け入れることに至った気持ちを聞き取った³⁵⁾。対象者17人中4人が、「自分の仕事・子供の教育・親の介護・家の管理」などを理由に一度は夫の海外駐在に同行しないことを検討したが、「夫の健康に配慮した・夫から協力を請われた」などを理由に気持ちを翻し、最終的に同行を決意するに至ったことが報告されている^{同上)}。

異文化に接し、それまで学習した行動や反応と異なる時に受ける違和感から来るショックが「カルチャー・ショック」であるが、一旦異文化に慣れた後自文化圏に戻った時に感じる違和感が「リエントリー・ショック」（または「逆カルチャー・ショック」）である。Adlerは、リエントリー・ショックは予想していなかっただけに、外国に移住した時に経験するカルチャー・ショックよりも大きいと説く³⁶⁾。長谷川は、米国大学への留学経験を持つ112名の日本人女性が、帰国後日本社会へ適応する際の問題を聞き取った³⁷⁾。「日本に帰国してリエントリー・ショックを感じた」と回答したのは約8割にも上った^{同上)}。リエントリー・ショックの内容として最も多かったのは「日本の男女格差」で、「日本人男性の性差別的言動に驚いたが、女性自身が周囲から期待される『女らしさ・可愛らしさ』に沿って振舞うことにもショックを感じた」と言う^{同上)}。次に多かった

のは「日本的コミュニケーション・スタイル」で、「イエス、ノーをはっきり言うてはいけなくてイライラすることがある」と戸惑いの声が聞かれた^{同上}。「日本の職場のタテ関係」については、「日本はヒエラルキーがはっきりしていて、規則に厳しく、事務的」と困惑した様子が聞かれた^{同上}。「集団主義的な日本人の振る舞い」について、「時間の使い方が日本の方がグループ思考で（中略）、みんな一緒に同じことをやっている」ことに違和感を抱いたと言う^{同上}。渡米経験を通して感じた意識変化への質問では、「多様性を受け入れるようになった」、「自分の意見を持つようになった」、「女性に対する差別、女性の権利や役割について考えるようになった」などの回答が挙げられた^{同上}。否定的な回答ばかりではなく、「外の世界に身を置くことで、日本に対する理解や洞察力を深めることができた」という肯定的な回答も多く報告されている。

田中は、一日本人女性のアイデンティティの変容について22年間の縦断研究を実施した³⁸⁾。対象者は19歳の時に米国に留学し、米国の大学、大学院修士課程、博士課程を修了、米国で結婚し、22年間サンフランシスコで暮らし続けた日本人成人女性である^{同上}。「変容したアイデンティティ」として挙げられたのは、宗教と家族についての価値観と、自身の性格であった^{同上}。性格は、留学当初は気が小さく引っ込み気味の性格であったが、自分の意見をきちんと言えないと認めてもらえない米国で暮らすうちに、やがて話すのが好きな明るい性格に変わった^{同上}。「自己主張が大切な米国で生活しなかったら、こんなに変化することはなかった」と対象者は言う^{同上}。「日米中間的アイデンティティ」として挙げられたのは、文化への意識、心の拠り所となる帰属意識と地理的アイデンティティであった^{同上}。初めの頃は米国文化に触れたことで日本との違いを意識し始め、日本で生まれたことを誇りに思っていたが、次第に米国文化の良さを理解できるようになり、やがて日本文化と日系文化と米国文化の3つを意識するようになった^{同上}。「日本で形成されて変容しなかったアイデンティティ」は、日本人としての民族アイデンティティであった^{同上}。米国で22年間生活しても、自分のルーツが日本であることを常に意識していることには変わりがないと対象者は言う^{同上}。

皆川は、日本人米国駐在員妻の認識する家族観の文化変容についての研究を実施した³⁹⁾。日本人妻 18 人、日本人米国駐在員妻 13 人、米国人妻 13 人が描いた家族イメージ図 (Family Image Technique; FIT)⁴⁰⁾ をデータ化し 3 群間で比較した結果、米国人妻群がイメージする「家族内での自己パワー」は、日本人妻群がイメージする自己パワーより強いことが明らかになった³⁹⁾。日本人妻と米国人妻がイメージする自己パワーの相違には、① 自己主張を控え、周囲に合わせることに高い価値を置く集団主義を背景にした日本社会と、個人としての選択や達成に高い価値を置く個人主義を背景にした米国社会との相違、② 男性が女性より上位に位置することが美德とされる日本社会の特性、③ 自分の意見を表明することに価値を置く米国社会の特性、④ 子供に素直であることを期待する日本人の子育てと、子供に自己主張・自己表現することを期待する米国人の子育ての相違などが挙げられている^{同上)}。さらに、米国人妻群がイメージする「夫と子供との絆」は、日本人妻群がイメージする「夫と子供の絆」より強く、また、駐在員妻群がイメージする「夫と子供の絆」は、日本人妻群がイメージする「夫と子供の絆」よりも強いことが明らかになった^{同上)}。日米両群がイメージする「夫と子供の絆」の文化的背景の相違には、① 性別役割分業の日米相違、② 父親子育ての日米相違、③ 家庭の中心は母親で父親の存在は薄いという日本の家族力学の特性、④ 夫が家事に関与する時間の日米差などの社会的背景が挙げられた^{同上)}。皆川の研究は、日本人駐在員妻群がイメージする「夫と子供の絆」が、長期間米国に滞在した末、文化変容したことを明らかにした^{同上)}。

第4章 研究目的

「多文化に配慮した心理支援をクライアントに提供するためには、どうすればよいのか」というリサーチ・クエスチョンに始まり、その答えを求めて次の2つの目的を据えた研究を進めた。一つ目は、異文化接触者が体験する葛藤の背後にある社会的・文化的・歴史的意味を解明すること、二つ目は、異文化接触者が葛藤と折り合いをつけ、滞在国文化を受容するプロセスを解明することである。研究協力者には、すでに明確な日本の文化的アイデンティティを形成している年齢の日本人海外駐在員妻を設定した。

本研究は、異文化接触者をカテゴリーに分類し、カテゴリー間の差異を求め、カテゴリー内の人々に共通性や普遍性を求め、あるいは、異文化受容の要因を調べることを目的としていない。むしろ、異文化受容プロセスは一人一人異なることを前提に置いている。その為には、一つの異文化理論にこだわらず、目的に合致すると考える理論を柔軟に取り入れ、多方向から分析を進める。

第5章 倫理的配慮

本研究は国際医療福祉大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：16-Ig-142）。研究協力者には研究目的，研究方法，同意は自由であること，一度同意した場合でもいつでも撤回できること，撤回しても不利益にならないことを口頭および紙面で説明した。研究への参加について十分に理解し納得した場合，研究協力者本人の自由意志による同意書署名を依頼した。個人面接では研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音したが，文字起こしの際，研究協力者の名前，語りの中に現れる人名や場所などは匿名化し，個人が特定されないよう配慮することを伝えた。研究の為に収集したICレコーダーのデータは保存期間終了後速やかに破棄し，紙資料はシュレッダー処理することを紙面および口頭で説明した。

第6章 研究方法

1. 研究協力者の選定基準とサンプリング

本研究の目的は、異文化接触者の文化的葛藤を検証し、その背景にある社会的・文化的・歴史的意味を解析し、滞在国の文化を受容するに至るプロセスを解明することである。研究の目的に沿って、異文化接触経験を持つ人に研究協力を依頼した。年齢、滞在国内、滞在年数などに依って異なる結果が出る可能性があるため、「米国に5年以上滞在した経験を持つ日本人駐在員妻」に設定基準を絞った。さらに、滞在地の地理的、経済的、民族的環境、異文化受容度⁴¹⁾、及び文化難易度 (cultural-toughness dimension)⁴²⁾ などの条件が結果に影響を与える可能性を回避する為に、駐在員妻の赴任地を「米国 New Jersey 州または New York 州」に限定した。駐在期間は、秋山の「渡航期間が4,5年以上経過してから文化的同一性の変化、拡張、統合が起こる」という論拠に準じ⁴³⁾、研究協力者の米国滞在年数を「5年以上」に統一した。異文化環境下では親と子はそれぞれ新しい文化を吸収し、それらをお互いに持ち寄ることで家族に新しい文化がつけられる⁴⁴⁾。特に、現地校に通う子供は言語以外にも物の考え方、自己主張の仕方、遊びやスポーツを通じた友人関係など、滞在地の文化を吸収し、家族全体の異文化受容に影響を及ぼすことから、全員「子供あり」に統一した。研究協力者の夫は全員日本企業の海外駐在員である。夫の国籍も家族の異文化受容に影響を与えると考えられるので、「夫は日本人」に限定した。現在子育てに関わっている人と子育てが終わった人とは、生活環境や遭遇する出来事が異なると考えられるので、研究協力者の年齢は同じライフ・サイクル上におり、子育てが終了している「50歳以上」に限定した。

サンプリング方法は、研究分析に用いた複線径路等至性アプローチでは、「人の経験は歴史的・文化的・社会的な文脈に埋め込まれ構成されているという認識のもと、同じような経験をした人を選ぶ」ことが指定されている⁴⁵⁾ので、研究者の個人ネットワークの中から上記選定基準に合致する人々に協力を依頼した。研究協力者の人数については、複線

径路等至性アプローチに提唱されている「9±2人は異なる質を生み出しうる」という説に基づき^{同上}、7人に協力を依頼した。

2. 質的研究を用いる理由

長年、心理学は自然科学と同じように科学になることを目指し、知覚・認知・動機・態度・パーソナリティ等、どのような要因が人間行動に影響するかが研究されてきた。心理学は外から見える行動の意味を客観的に捉える行動主義を礎にし、そこでは「意味」は無視されてきた。しかし、人々の日常生活は数字によって全て表されるものではない。人間理解では、数字には表れない「意味」を読み取ることが重要な役割を果たすのではないかとこの疑問が投げかけられた⁴⁶⁾。Brunerは、認識と思考の仕方には「論理実証モード」と「物語モード」の2つの様式があり、そのうち「論理実証モード」では仮説に導かれ数学を用いて普遍的な真理の探求に向い、「物語モード」では一般化したりどれが正しいかと結論を一つ出すことはせず、出来事がどのような社会的・文化的・歴史的な脈に基づいているかを問う、と論じた⁴⁷⁾。「物語モード」を用いることにより、従来の「論理実証モード」心理学が扱わなかった、個人史・家族史・個々人の社会との関わりなど、対象者一人一人の心の「意味」を重視することが出来る⁴⁶⁾。社会学者 Goffman は、文化と心とが相互に形成し、維持し合うダイナミックスを分析する手段として、日常の様々な場面を「スクリプト」にすることを提唱している²³⁾。本研究では、「スクリプト」の代わりに駐在員妻が語る「異文化体験物語」を用い、文化的・社会的・歴史的な背景に着目しながら、一人一人の心の「意味」を分析する。

3. ナラティブ・インタビュー

1990年頃から心理学は、「意味」を扱うナラティブ心理学へと発展した。ナラティブ（語り、物語）の中心概念は「意味」であり、ナラティブ・アプローチは、「意味」の問題を「時間」という文脈に位置付けることを重視するようになった⁴⁸⁾。また、インタ

ビュー方法はナラティブ・ターンの興隆と共に変化を遂げてきた。従来多く使われて来た半構造化インタビューは、構造化インタビューと非構造化インタビューの間に位置し、インタビューに先立ち質問項目を盛り込んだガイドが準備され、特定の話題に関する情報を得ようとする際に用いられていた⁴⁹⁾。インタビューを受ける人はインフォーマント（情報提供者）と呼ばれ、いつ、どこで、誰が聞いても同じ「情報」が得られると考えられていた。しかし、半構造化インタビューを用いた研究の多くは、研究者の側が用意した枠組みを用いて「研究協力者に説明しようとしている」との批判も出ている⁵⁰⁾。

本研究では、研究協力者との面接にナラティブ・インタビューを用いた。ナラティブ・インタビューでは、聞き手は語り手の声に耳を傾け、必要に応じて質問の仕方を調整していく態度が求められる。語り手の自由な語りの中にこそ研究者には測りきれない出来事や体験過程の語りが聞けると考え、「米国駐在の経験について語って下さい」というテーマを提供しただけで枠を設けず、質問も最小限に留め、語り手の声に耳を傾ける態度に徹した。その為、語り手自身が一番気にかかっていた子供の教育について語る人、日本の親の介護を十分にできなかった悔いを語る人、米国の政治について語る人など、多様な経験を聴くことが出来た。

一回のインタビュー時間は約1時間半から2時間半で、一人の研究協力者に2回ないし3回インタビューを行った。研究者が研究協力者に直接会ってインタビューしたケース、電話でインタビューしたケース、1回目は対面インタビューで、2回目以降は研究協力者の時間の都合または距離的制限によりインターネット機器を媒体としてインタビューしたケースなど、研究協力者の都合に合わせてインタビュー方法を変えた。研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音し、音声文字起こしした。

4. 複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)

4.1 用語の説明

ナラティブ・インタビューで得た情報を整理・分析する方法として、複線径路等至性アプローチを用いた。複線径路等至性アプローチは、人間の成長を時間的変化と文化との関係で展望する研究方法論である^{51,52)}。複線径路等至性アプローチでは、経験はそれぞれの人生の中で独特かつ多様なあり方を示すが、それでも多くの人に共通の通過点や到達点があると考え、その共通の通過点を「必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)」という。「一つのゴールに達するまでには多様な径路を辿りながら、同じ到達点に達する」という等至性概念の行き着くポイントを「等至点(Equifinality Point: EFP)」という。

複線径路等至性アプローチでは、非可逆的時間を矢印で描くことを定めている。この非可逆的時間とは、計時可能な物理的な時間ではなく、決して後戻り出来ない時間の流れの方向性を意味している。非可逆的時間の中で、人は様々な葛藤を経験し、その都度進むべき道を選択する。人がどの径路を選択するか迷い、葛藤する点が「分岐点(Bifurcation Point: BFP)」である。「必須通過点」、「分岐点」、「等至点」に至る複数径路を矢印でつなぐ方法が「複線径路等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)」で、これにより時間の経過による個人の変遷が可視化可能になる。

複線径路等至性アプローチでは、ある点にたどり着くには社会的な力が働いていることに着目し、促進する力を「社会的助勢(Social Guidance: SD)」、阻害する力を「社会的方向づけ(Social Direction: SD)」という。研究協力者がどのような葛藤を経験し、どのように乗り越え、どのような心理で自分の道を選択したかに留意しながら話を聴くことがインタビューの重要なポイントとなる。本研究では、「社会的助勢」と「社会的方向付け」を、どちらも肯定的でもなく否定的でもない「日本文化維持を促進する力」と「米国文化受容を促進する力」に置き換えて、複線径路等至性モデルを作成する。

4.2 分析の手順

分析の手順は、次のとおりである。

- ① 研究協力者から聴き取った体験過程の語りを文字起こしし、読み込み、出来事やそれによって生起された感情、態度などで共通した部分を抽出し、まとまりとしてカードにして切片化を行なう。カードに小見出しをつけ、時系列に並べ、カードとカードを線でつなぎ、研究協力者7人それぞれのライフ・ラインを作成する（添付資料：参照図1~7）。
- ② 研究協力者7人のライフ・ラインを重ねる。7人全員が最初に共通して通過するポイント、すなわち「必須通過点」を設定する。節目節目で共通して通過するポイント、すなわち「中間等至点」と、協力者が共通して到達するポイント、すなわち「等至点」を設定する。次に、「葛藤（分岐点）」、「日本文化維持を促進する力」、「米国文化受容を促進する力」に着目しながら情報を加える。必須通過点、中間等至点、葛藤、経験、等至点を線で繋ぎ、暫定的な複線径路等至性モデルの図案を作成する（添付資料：参照図8~12）。
- ③ 暫定的な複線径路等至性モデルの図案を研究協力者に見てもらいながら2回目、3回目のインタビューを実施する。研究協力者から得た新たな情報、または研究協力者が修正した情報を図案に加えていく。「日本文化維持を促進する力（社会的助勢）」と、「米国文化受容を促進する力（社会的方向づけ）」を図案に加えていく。

複線径路等至性アプローチの用語と本研究における意味を表1に示した。

表1 複線径路等至性アプローチの用語と本研究における意味

用語	意味	本研究における設定
必須通過点 Obligatory Passage Point (OPP)	ある地点に移動する為に 必ず通るポイント	米国(New Jersey 州/ New York 州)に家族と ともに移動する
等至点 Equifinality Point (EPP)	多様な経験の径路が一旦 収束するポイント	日米文化統合
両極化した等至点 Polarized Equifinality Point (P-EFP)	等至点と価値的に相対化 した収束地点	日本文化維持・ 米国文化同化
分岐点 Bifurcation Point (BFP)	複数の選択肢が発生する 分岐点。 転機・葛藤・決心どころ	例：仕事を辞めたくない、 親の介護の為に帰国したい 等の葛藤
社会的方向づけ Social Direction (SD)	等至点に至る有り様を 阻害する力	米国文化同化を促進する力
社会的助勢 Social Guidance (SG)	等至点へ向かう有り様を 促進する力	日本文化維持を促進する力
非可逆的時間 Irreversible Time	時間は後戻りしない。 →で表す	
複線径路等至性モデル Trajectories Equifinality Modeling: TEM	人生径路の複線性・ 多様性を表す図	

第7章 研究結果

1. 研究協力者のプロフィール

インタビュー時点での研究協力者の年齢は、50代3人、60代3人、70代1人であった。本研究の必須通過点である米国 New Jersey 州または New York 州に駐在した平均年数は14.3年、米国駐在を含めた外国生活年数は22.7年、滞在した国の平均は3.6カ国、最も多かったのはDさんの9カ国であった。インタビューの時点で7人の研究協力者のうち5人は日本で暮らし、2人は米国で暮らしていた。子どもの平均人数は3.3人。インタビュー時、研究協力者の子供達が暮らしている国は米国、英国、カナダ、日本などで、研究協力者7人のうち「子供が全員日本に住んでいる」のは1人であった。研究協力者の駐在前、駐在中、帰国後の職業は、大学講師、陶芸家、通訳、看護師、カウンセラー、スポーツ・インストラクター、日本料理の講師、クラフト・アーティスト、教師などである。

本研究の協力者7人のプロフィールは、表2に示した。

表2 調査協力者のプロフィール

名前	年齢	米国 NJ 州, NY 州で暮らした年数	本駐在を含めた外国生活年数	滞在した国の数	家族構成	インタビュー時暮らしている国	子供が暮らしている国
Aさん	60代	8年	15年	5カ国	夫 子供3人	日本	米国 英国 日本
Bさん	70代	30年	50年	2カ国	夫(逝去) 子供5人	米国	カナダ 米国
Cさん	50代	20年	22年	2カ国	夫 子供3人	日本	日本 米国
Dさん	50代	15年	30年	7カ国	夫 子供4人	日本	日本 米国
Eさん	60代	14年	19年	1カ国	夫 子供3人	米国	米国 日本
Fさん	50代	8年	8年	1カ国	夫 子供2人	日本	日本
Gさん	60代	5年	15年	1カ国	夫 子供3人	日本	米国 日本

2. 複線径路等至性モデル: 5ステージの設定

研究協力者7人のライフ・ライン7枚(添付資料:参照図1~7)を並べて検討したところ、7人の径路は異なっているが、節目節目で数人が同じ経験をしていることがわかった。共通点を重ねて5枚の複線径路等至性モデルの図案(添付資料:参照図8~12)を作成した。研究協力者7人の最初の共通経験は「夫が米国赴任の辞令を受ける」であり、それを必須通過点に設定した。節目節目で見られた研究協力者7人の共通経験を中間等至点に設定した。

ステージ1の設定

1つ目の中間等至点は「家族と共に夫の米国赴任に同行する」を抽出した。「夫が米国赴任の辞令を受ける」から「家族と共に米国駐在に同行する」までの工程をステージ1とし、複線径路等至性モデルを作成した(図2)。ステージ1の葛藤は、「米国赴任に帯同するか、日本に残るかの選択」である。米国赴任に消極的な研究協力者の径路は左寄りに、米国赴任に積極的な研究協力者の径路は右寄りに描いた。

ステージ2の設定

外国で子供を育てる日本人駐在員妻が海外駐在後初めに遭遇する葛藤は、「子供の教育を日本語にするか、英語にするかの選択」である。子供の学校選びは、研究協力者7人に共通する課題であると捉え、学校選びの工程をステージ2とし、複線径路等至性モデル(図3)を作成した。日本語教育を選択した研究協力者の径路は左寄りに、現地校の教育を選択した研究協力者の径路は右寄りに描いた。

ステージ3の設定

海外駐在員家庭において、夫のサポートの有無は夫妻間のダイナミックスを体現する要素の一つとして捉えた。本研究協力者7人は全員、「家庭内役割分担受容」という共通点

に至っている。海外駐在員妻の葛藤、および異文化受容プロセスを解明するには、家庭内役割分担に対する対象者一人一人の心の「意味」を解明する必要があると考え、「夫からのサポートの有無」から「家事役割分担を受容する」に至る工程をステージ3とし、複線径路等至性モデル（図4）を作成した。夫からのサポートがあったという発言は右寄りに、夫からのサポートがなかったという研究協力者の径路は左寄りに描いた。

ステージ4の設定

次に研究協力者7人が共通して得た経験は、「米国で自分の居場所を得た」である。「自分の居場所を探す」から「米国で自分の居場所を得る」までの工程をステージ4とし、複線径路等至性モデルを作成した（図5）。ステージ4の葛藤は、「日本人コミュニティか、米国人コミュニティかの選択」を抽出した。日本人コミュニティに居場所を求めた研究協力者の径路は左寄りに、米国人コミュニティに居場所を求めた研究協力者の径路は右寄りに描いた。

ステージ5の設定

帰国後または夫の定年後、妻は駐在員妻および母親の役目を解かれ、比較的自由に自己表現できる立場にいる。研究協力者は米国生活からいかなる影響を受けたのか、帰国して日本の生活をどのように感じているのかなどについての語りを分析した。その結果、研究協力者7人全員が、日米文化を受容していることが理解できたので、「日米文化統合」を等至点に設置した。「帰国後・夫の定年後」を出発し、「日米文化統合」に至る工程をステージ5とし、複線径路等至性モデル（図6）を作成した。ステージ5の葛藤は、「日本文化維持か、米国文化受容かの選択」であり、日本文化維持を選択した研究協力者の径路は左寄りに、米国文化同化を選択した研究協力者の径路は右寄りに描いた。

本研究の複線径路等至性モデルで使用した記号を図1に示した。

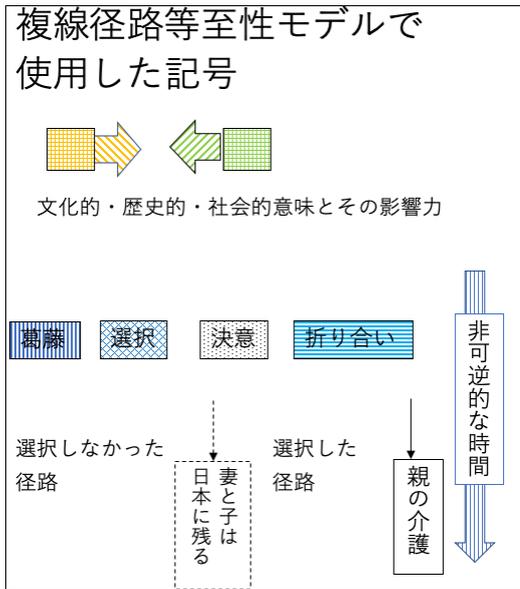


図1 本研究の複線径路等至性モデルで使用した記号

3. ステージの課題と葛藤

各ステージの課題と葛藤を表3に表した。

表3 各ステージの課題と葛藤

ステージ	課題	葛藤
1	米国行きを決意する	日本に残るか、米国駐在に同行するかの選択
2	子供の教育	日本語教育か、英語教育かの選択
3	夫からのサポート	家庭内役割分担を受け入れるか否かの選択
4	自分の居場所を見つける	日本人コミュニティか、米国人コミュニティかの選択
5	帰国後・夫の定年後	日本文化維持か、米国文化同化かの選択

4. ステージ 1: 海外駐在を決意するまで

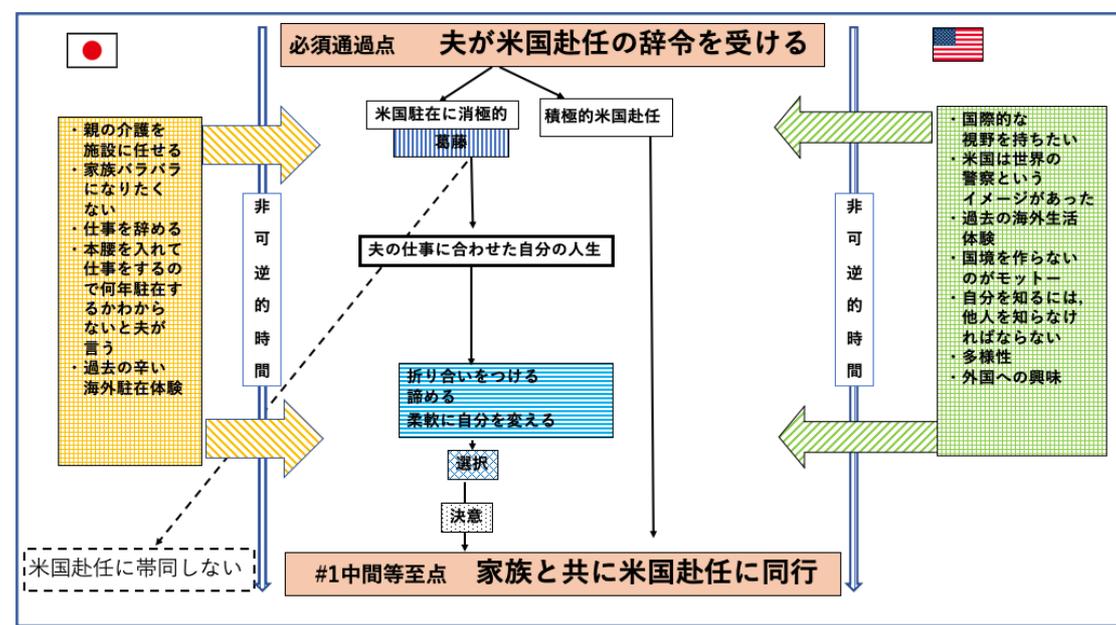


図2 ステージ1 「米国赴任を決意する」

通常会社員が会社から海外駐在の辞令を受けると、数週間以内に後任者への引き継ぎを終え、その後現地に赴き前任者から仕事を引き継ぎ、遅れてやって来る家族と一緒に住む家探しにとりかかる。一方、日本に残った妻は引越し荷物をまとめ、家を空ける準備をし、仕事を持つ人は職場を辞し、子供がいる人は幼稚園や学校を退学する手続きをとり、親が老齢の場合は留守中親の世話をしてくれる施設を探し、海外行きの飛行機に乗る。現地に着けば、妻は子供の学校への送迎、荷物が届くまでの仮住まいを整え、数ヶ月後荷物が届けば大量の段ボール箱を開けて中身を片づける作業が約半年間続く。落ち着くまでに身体的に疲弊することは紛れもないが、難しいのはそこに至るまでに一人一人が遭遇する心理的葛藤を乗り越える工程である。

ステージ1の出発点は「海外赴任の辞令を受ける」、中間等至点は「家族とともに米国赴任に同行する」である。複線径路等至性モデル1（図3）左寄りに描かれているのは、「米国赴任同行に対して消極的」な人々の径路で、文中では_____（下線）で表した。複

線径路等至性モデル1（図3）右寄りに描かれているのは、「米国赴任同行に対して積極的」な人々の径路で、文中では（網がけ）で表した。「米国赴任同行に対して消極的にする力」として、「過去の辛い駐在経験、語学、親の介護、子どもの日本語教育、性格、仕事」を抽出した。「米国赴任同行を積極的に受容する力」には、「家族が一緒にいたい、子どもの英語教育に期待、外国を知ることへの好奇心、過去に海外生活経験がある、語学力、性格、労働許可」を抽出した。

4.1 積極的米国赴任

外国文化への憧れ

Aさんは、若いころから日本人としてのアイデンティティについて考えていたので、外国駐在をチャンスと捉えた。以下（ ）内の言葉は、説明補足の為に研究者が付け加えた。

若い頃から「日本人の自分はどうか？日本人のアイデンティティは何なのか？」と
考え、自分のアイデンティティを探す為には相手を知らなければならぬと考えて
いたから、日本を外から眺め、日本人や自分のアイデンティティについて考える
は、海外駐在はチャンスでした。

米国に赴任する前に他の国（4カ国）にも行っていたけど、どこの国でも現地の人
を知るというのが私の第一の関心でした。単純に興味だけじゃなくて、自分のアイ
デンティティを探す為には相手を知らなければならぬと思っていた。

日本の大学で国際政治学を学んだFさんも、米国赴任同行をチャンスと捉えた。「当
時の米国は豊かさの象徴で、世界の警察というイメージがあったから憧れていて、米国に
行くことに興味津々でした」。

過去の外国生活経験

高校時代 AFS (American Field Service) で米国に留学した経験を持つ B さんにとって、海外駐在に葛藤はなかった。B さんは日本で結婚、夫の最初の勤務地 L 国で 2 年半、2 つ目の赴任地 M 国で 19 年間暮らした。3 つ目の赴任地・米国行きの際は事前に「日本か米国か」という選択肢を会社から与えられ、その時点で 5 人の子供は全員英語を第一言語としていたので、夫妻で相談し、米国赴任を選択した。海外駐在する前に本人や家族の意向を聞く会社はほとんどない中、稀なケースである。

D さんは、父親の仕事で幼い頃外国暮らしをした経験を持ち、結婚後は夫の仕事で 25 年以上の海外駐在経験を持つ自称「コスモポリタン」である。結婚後「ヨコヨコ駐在」（駐在地从日本を経由せず次の駐在地に移動する）を重ね、米国赴任は 2 度目であった。1 度目の米国赴任の辞令を受けたのは 3 つ目の赴任地 Q 国に駐在していた時で、その時 D さんは 4 人目の子を妊娠していたが、米国駐在に同行することに「抵抗はなかった」と言う。夫が先に赴任した後一人で引越し荷物をまとめ、3 人の幼子を連れて飛行機に乗った。

仕事を断って夫に同行する

夫の外国駐在に同行することでキャリアを諦めることは、駐在員妻にとって大きな葛藤である。結婚前通訳の仕事をしていた D さんは、一度は出産、その後は海外赴任を理由に仕事を辞めた。夫の海外赴任に同行する為に仕事を辞めることに葛藤はなかったのか、尋ねた。

23 歳で結婚して（日本で）長男が生まれました。「仕事に復帰して」と言われて子供を母親に預けて働いたけど、おっぱいが溢れて来て... それで諦めました。その後も仕事の話が来て、誘惑があったけど、そんな時夫が O 国に赴任することになったので、諦めがつきました。（2 つ目の赴任地）P 国、（3 つ目の赴任地）Q 国にいた

時も仕事のオファーがあり、悩みましたが、「子供が小さいから」と言って、仕事はきっぱり断りました。

もし日本にいて仕事の誘惑があったら、（仕事を出来ないことは）ハッピーじゃないじゃないですか。外国にいてそれがなかったから、むしろよかった。私の場合、外国に移ったことで、キャリアへの誘惑から逃れることが出来たと思います。

Dさんは、海外駐在によってキャリアが断たれたことを後悔するより、「子育てに専念できたてよかった」と語った。

4.2 消極的米国赴任

親の介護

Eさんは、夫の親と自分の親が介護を必要としており、米国赴任に同行することに抵抗があった。その数年前にEさんは一つ目の赴任地S国にいたが、義母が病気で倒れたのをきっかけに帰国していた。

主人の兄弟から「（義母の）面倒をみれない」と言われて（介護の為にS国から）帰ってきました。（帰って来た時）主人の母はV県（関西地方）の病院に入院していたので、顔を見に行くだけでよかった。（義母は）病院に一年ちょっといた。その後持ち直したので、W県（関東地方）の我が家に引き取って、一緒に住みました。

夫が二度目の赴任で米国に行く時は、（義母を）入院させました。（義母は）「入院しているから心配しないでいいから、行っておいで」と言ってくれた。結局、十数年間病院生活。．． かわいそうだった。．．

Eさんの母親もV県（関西地方）で長男家族と暮らしていた。

兄が親の面倒を看ることになっていたんだけど、何もしてくれなくて．．．(中略)．．．母が88歳の時、デイサービスで転んで大腿骨にヒビが入った。(兄家族が)食事を作らず、母はやせ細っていました。妹とケアマネに相談して、入院させてもらいました。

介護を必要とする二人の親を残して日本を離れる決心がつかないEさんの背中を押したのは、「今度(の米国赴任)は本腰を入れて仕事をするので、帰国は何年先になるかわからない」という夫の言葉だった。「家族がバラバラになりたくない」という思いが、親の介護をすることを諦め、他人に任せる決意をさせた。Eさんの夫の米国駐在は14年間に及んだが、Eさんは親の介護をする為に夫より一年先に帰国した。

海外にいる間ずっと心配だったから、(見舞いに行けて)ホッとした。もし主人と行動を共にしていたら、後悔していた．．．(母が)88歳の時、妹と温泉に連れて行ったんです。すごく喜んでくれてね。それをやったから、後悔していません。

夫が帰国し定年退職してからは、毎月夫婦で関西地方の病院まで親の見舞いに行っていた。「これが私達の仕事だね」って、6年間そういう生活をしました。

海外に居てやりたくてもやれない介護を周囲は理解してくれない。「海外(生活)、いいですよ」という人に聞かせたい。「駐妻はラクしたでしょう」と人に言われるけど、介護したくても出来ないことを理解して欲しい。「親が危篤」と言われてからでないと帰国できないんですからね。親の最期を看取れないのは海外赴任の宿命です。

5. ステージ 2：子供の教育選び

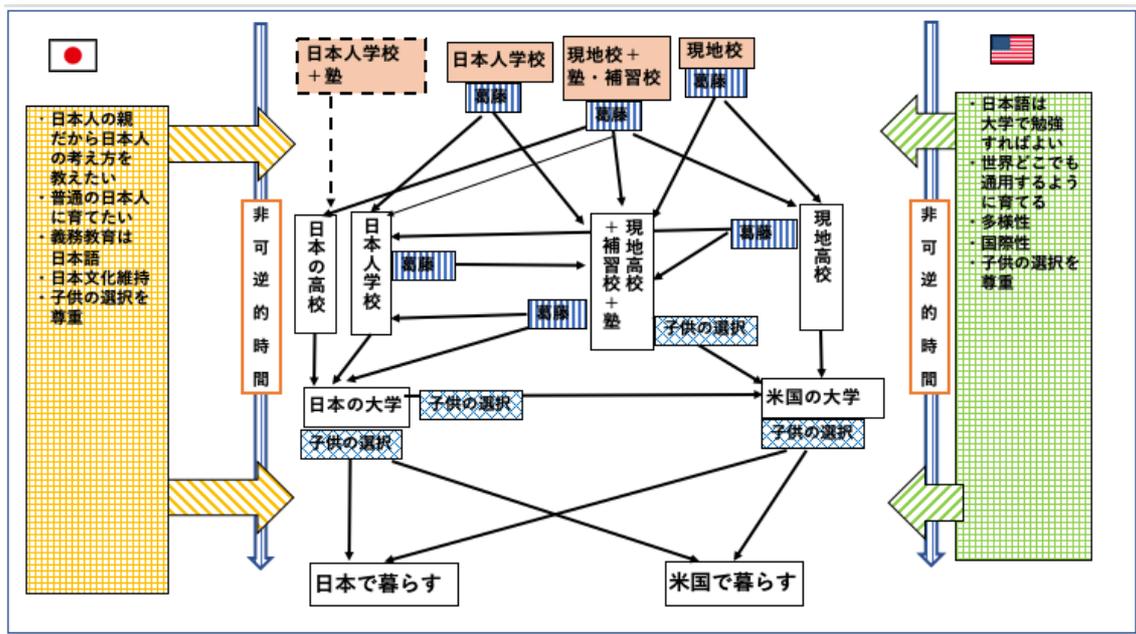


図 3 ステージ 2「子供の教育選び」

海外に赴任する勤労者と家族にとって大きな悩みとなるのは、子供の教育である。特に子供の受験期が近く、日本で教育を受けさせたいと望む親にとって、海外駐在の道を選択することには葛藤がある。子供の教育の選択は、子供の将来に大きな影響を与える。会社による海外赴任辞令はたいてい突然出され、赴任期間は定まっておらず、次の赴任地が日本なのか他の国になるのかも予想がつかない。駐在地、駐在期間、子の年齢など様々な要素の変化に伴い、その都度子供の学校選びを修正する必要がある。

外国にある日本人学校は、日本国内の小学校又は中学校における教育と同等の教育を行うことを目的とする全日制の教育施設で、小学 1 年から中学 3 年の 9 学年があり、帰国後日本の私立小学校や中学校受験を目指す子どもが通う。日本人学校に塾を加えると、米国にしながら親も子も日本人コミュニティ内で過ごし、帰国までほとんど米国文化に接触しないで終わる。日本語補習授業校（以下、補習校）は、週日現地校に通学している子供が日本語維持の為に通う学校である。たいてい土曜日朝から午後 3 時頃まで、米国の私立

学校の校舎を借りて催される。幼稚園から高校3年まで13学年あり、国語、算数（数学）等の基礎教育を学ぶ。日本の学校で一週間かけて学ぶカリキュラムを補習校ではたった一日で学ぶので、漢字や算数ドリルなどの宿題が多い。子供達は現地校の宿題に加えて日本語の宿題をこなすことになるので、多くの子は補習校の前日は日本語の宿題をこなす為に夜更かしする。週末、米国の子供はサッカー、野球、バスケット・ボールなどのスポーツに参加することで仲間意識を深め、友達の家泊まりに行ったり来たり（sleep over）することで交友を深める。また、子供の為に派手なバースデー・パーティーを催すのが米国文化の一つであるが、補習校に行くことでそうした「子供の社交界」に参加する機会を失う。しかし、「日本文化維持」を望む親にとって、子供が米国人の友達と交流する機会を減らしてまで補習校に行かせるメリットはある。子供たちは運動会、餅つき、習字など日本文化に接触する機会が得られる。又、英語と日本語の両国語の勉強に苦しむ仲間に出会うことで、日本語の勉強を継続する勇気もらえる。外国で補習校に通うことは単に日本語を勉強するだけではなく、日本文化を知り、同じ境遇にいる仲間と出会う機会になる。

複線径路等至性モデル2（図4）左寄りに描かれているのは日本文化に最も近い「日本人学校+塾」という選択をした研究協力者の径路で、日本の学校を受験することを念頭に置いている。右に移動するに従って徐々に脱・日本文化、向・米国文化へ進み、一番右寄りに描かれているのは「現地校だけ」という選択である。ステージ2の課題は、「日本文化を維持するか、米国文化を受容するか」の選択である。日本文化維持、すなわち日本語教育選択を促進する力は、「親の教育理念、子供の選択、駐在期間、子供の年齢」を抽出した。米国文化受容、すなわち英語教育選択を促進する力は、「子供の選択、駐在期間、子供の年齢」を抽出した。ステージ2では7人の研究協力者に共通の中間等至点はなく、複線径路等至性モデルに矢印 \longleftrightarrow が多いのは、葛藤や選択のやり直しが多いことを表している。

5.1 現地校

国際派

「国境をつくらない」という信念を持つ A さんは、3 人の子供はどこで暮らしても現地校に通わせた。「子供達も好奇心いっぱいだった」。しかし、親が転々と海外駐在を重ねる中、1 子は自らの意思で日本の高校に進学する道を選び、家族と離れて単身日本に移った。その後も 1 子は日本で暮らす道を選んだが、仕事を退職した後は外国の学校で学び直す選択をし、日本を離れた。2 子は米国で暮らす選択をした。外国で生まれ、小学生の時親と共に帰国した 3 子は、日本で暮らす道を進んだ。

「子供を外国で教育して良かったと思いますか」と研究者が尋ねると、A さんは「う〜ん、良かったと思う。でも、うちの子供は例え外国に行かなくても、自立していたと思う。親の生き方が見本になるから。苦労もあったけど、子供達は意外と個性的に育ったと思う」と答えた。

英語だけ

B さんには、駐在 2 カ国目の M 国で教育選びの転換が訪れた。1 子が 3 歳の頃、保育園でボーッとしている我が子の様子を見て B さんはショックを受けた。「My child is not born to be a follower, but a leader（私の子供はフォロアーじゃなくて、リーダーになるべき）」と考え、「すぐに英語を優先することを決意しました。図書館で絵本を見せながらひたすら英語をインプットして、ついに第一言語を英語に切り替えました」。その結果子供の英語力は上達し、先生に褒められるようになった。「2 子は日本語で育てようとしたけど、too late（遅すぎた）！ 兄弟で英語で話していました。それを見て、『ま、英語で考えればいいか！』と考え直しました。でも、もしもう一度機会があるなら、日本語を続けて教えて、日英バイリンガルにする自信がある」と語った。外国（北米）で生まれた 5 人の子供は、インタビュー時は全員米国を含め、北米で暮らしていた。

5.2 日本人学校→現地校

Cさんは駐在して2年目に夫が「会社を辞める」宣言をしたことで、それまで帰国後すぐに適応できることを目指して日本に向けた生活をしていたのが180度方向転換した。

「留学した気分になる」つもりで、家族は日本人がほとんどいない田舎町に引っ越した。子供3人のうち2人はそれまで日本人学校に通わせていたが、引っ越しを機に現地校に転校させ、補習校で日本語を維持させた。インタビュー時1,2子は日本で暮らし、3子は両親と共に米国で暮らしていた。

5.3 日本人学校←→現地校

海外の国々をヨコヨコ駐在していたDさんではあるが、「私も夫も日本人で、日本人の家庭なので、日本の考え方を伝えようと、外国にしながら日本語で教育する」という信念を持っていた。しかし、海外駐在が長期化するに連れ、「世界のどこに行っても通用するように育てよう」と考え直し、4人の子のうち1,2子は「現地校+日本語塾」、3,4子は「義務教育程度の日本語は身につけさせたかった」ので、外国の日本人学校に通わせた。米国に移住した時点で1,2子は日本の中学受験を目指して日本の勉強をしていたが、途中から日本語をやめて英語だけにスイッチした。3,4子は米国の日本人学校に通い、「英語はまるまる忘れて日本人の生活」を送っていたが、途中で英語の学校にスイッチした。駐在期間の長期化と、子供の年齢に合わせて親の選択は刻々と変わり、日本語教育と英語教育の間を柔軟にスイッチしていった。インタビュー時、4人の子供のうち1人は日本で暮らし、3人は米国で暮らししていた。

5.4 子供の年齢

Fさんの米国駐在は8年間と長期に渡ったが、渡米時生後2ヶ月だった1子は帰国時8歳、米国駐在中誕生した2子は帰国時3歳であった。1子は現地の幼稚園に通い、日本語補習校で日本語を学んだ。帰国後は「普通の日本人として育てたい」と親が考えていたの

で、英語に重点を置かず、英語維持の教室には通わせながら日本の教育に徹した。帰国して数年後に米国を訪れた時、英語の発音と聞き取りが昔と変わっていなかったことを嬉しく思い、「もっと英語の本を読ませれば良かった」という後悔の気持ちも生まれた。インタビューの時点で、研究協力者7人中ただ1人、子供が全員日本で暮らしていた。

5.5 子供の選択

子供の教育を日本語、英語、日英両国語にするかは親の教育理念によって決まる。しかし、親の価値観で子供の学校を決めるのは子供が中学校を卒業するまでで、高校以降は子供自身の選択となる。Aさんのケースはその例で、親が転々と海外駐在を重ねる中、3人の子のうち1子は、本人の希望で単身日本の高校に選択をした。日本の大学を経て日本の企業に就職、離職後は、再び外国で学び直す道を選んだ。

Gさんの3人の子のうち1人は米国の高校を卒業後日本の大学へ進んだが、「日本の教育は合わない」と米国の大学に転入する道を選び、その後は米国で暮らしている。インタビュー時、3人の子のうち1,2子は米国で暮らし、3子は日本で暮らしていた。

6. ステージ3: 夫からのサポート

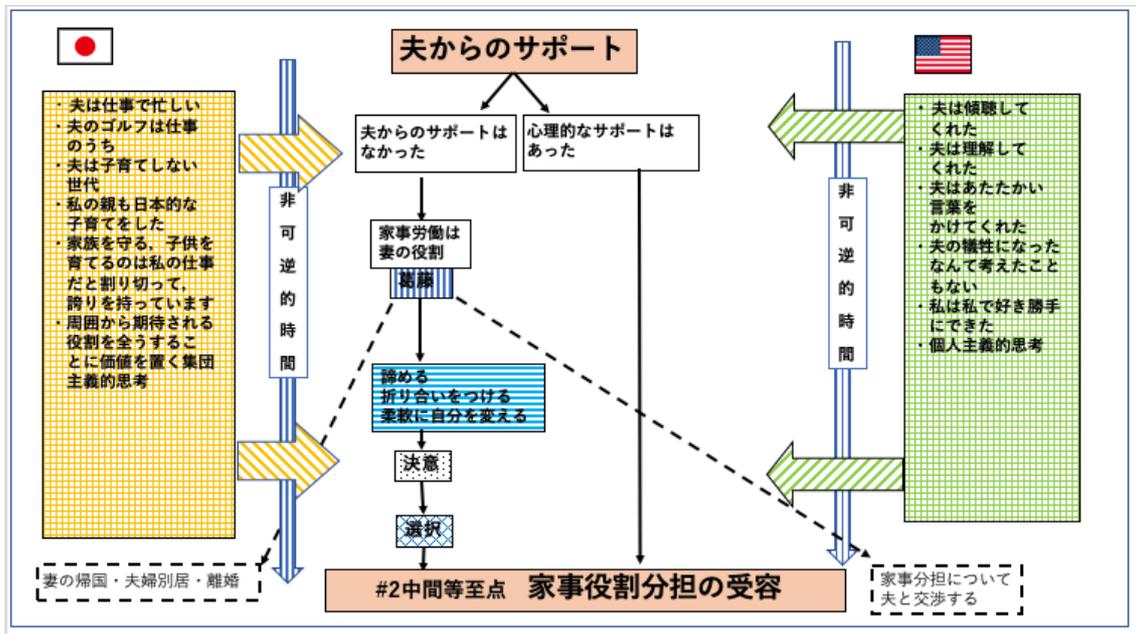


図4 ステージ3「夫からのサポート」

海外に駐在することは、駐在員本人にとっても新しい職場で外国語を使って仕事をすることはストレスになるが、妻にとっては孤独になりがちである。顔見知りの人はなく、近隣の人に尋ねたいことがあっても言葉が通じず、子供が新しい学校になじめない時などは、特に心細くなる。頼りにしたい夫は仕事で帰りが遅く、週末は接待、日本へ出張すれば長期間家を空ける。「夫から妻へのサポートの有無」は、駐在員妻の海外生活満足度を左右するだけではなく、「夫は仕事、妻は家庭」という日本的な性別役割分担の受容にもつながる。ステージ3の葛藤は「家庭内性別役割分担を受け入れるか否かの選択」である。複線径路等至性モデル3(図5)では「夫のサポートなし」の研究協力者の径路を左寄りに、「夫のサポートあり」を右寄りに表わした。男性上位のタテの夫妻関係(性別役割分業)を促進する力は「性格・諦・覚悟・子育て・夫の仕事優先・自由・良妻賢母や夫唱婦随などの儒教的価値観・相互依存的自己観・親の育て方」、男女平等のヨコの夫妻関係を促進する力は「仕事・家計・性格・必然性・自由へのこだわり」を抽出した。文中、

「夫のサポートなし」，または「男性上位のタテの夫妻関係（性別役割分業）」を受容する言動は_____（下線），「夫のサポートあり」，「男女平等のヨコの夫妻関係」を受容する言動は_____（網がけ）で表わした。

6.1 夫からのサポートあり

「海外駐在中，ご主人からのサポートはありましたか？」と質問したところ，研究協力者 7人中ただ一人 Bさんは「心理的サポートはしてくれましたよ」と答えた。

夫は心理的にはサポートしてくれましたよ。でも実際は出張で家を空けることが多かったけどね。

出産の時，夫が出張していて，上の子供たちはベビーシッターに預けて自分一人でタクシーに乗って病院に行ったことがある。病院では看護師たちが”Is she married? (彼女は結婚しているのかしら)”なんて噂しているのが聞こえた。他の人は家族が見舞いに来るのに，うちは1,2回来ただけで又出張に行ってしまったからね。

でも自分も忙しかったし，私一人で子育てすることを当然だと考えていたので，夫がサポートしてくれなくても苦に思わなかった。私は私で好き勝手にすることが出来たので，夫が家にいなかったことで夫の犠牲になったとは考えたこともない。

Bさんの夫は仕事で家を空けることが多く，子育てや家事など肉体的なサポートはしなかったが，「私が外国で好きなことを自由にできたのは，夫の並外れた忍耐力と理解力のお蔭」，「私が何をしても，夫はいつでも全面的にサポートしてくれた」，「夫はよく，私が幸せなら彼は幸せだと言ってた」など，心理的サポートがあったと語った。

6.2 夫からのサポートなし

夫からのサポート不要

Gさんは「夫のサポートは全くなかったです」と語ったが、「でも、なかったのがよかったかも。だから(私は)好き勝手にできた」と、夫のサポートがなかったことで、かえって自由に振る舞えたと言った。「(米国に行った)当初は子供は英語ができなかったから、もっと(夫が)サポートしてくれればよかったけど、子供は(父親が)いなければいけないで勝手にやっていました」と、夫のサポートがないことを肯定する言葉が続いた。

性別役割分担の積極的受容

日本では国際会議の同時通訳の仕事をしていたDさんは、「『子供が小さいから』と仕事はきっぱり断りましたが、その後も仕事のオファーがあり、誘惑があったけど、そんな時夫がO国に赴任することになったので、諦めがつきました」。「外国に移ったことで、キャリアへの誘惑から逃れることが出来たと思います」と、子育てに専念する役割を受け入れるに至った心境を語った。Dさんは、海外駐在先では、「夫は仕事で多忙」「(週末の)夫のゴルフは仕事の一部」「夫は子育てしない世代」故に夫のサポートはなかったと語り、「家族を守る、子供を育てるのは私の仕事だと割り切って、誇りを持っています」と、性別役割分担を積極的に受け入れていた。しかし、「現代は日本でも働く女性の数が専業主婦の数を上回る時代になりましたね」と筆者が言うと、「今は違いますね。時代が変わった！時代が遅れたって感じます」という感想も語った。

前述のBさんも、「私一人で子育てすることを当然だと考えていたので。．．（中略）．．．夫が家にいなかったことで夫の犠牲になったとは考えたこともない」と、性別役割分担を積極的に受容している一人である。

6.3 妻が夫をサポート

家計分担

Cさんは、夫の赴任命令で米国に駐在して2年目に夫が突然「会社辞めます」宣言をして以来、家族の中での自分の役割が大きく変わった。

郊外に行くことは夫の選択だったの。それまで私は夫に三つ指ついて仕える「良い嫁」だったの。夫が言うことは100%、夫が私の世界。これは別にノロケではないけど、（日本での）彼の親との同居生活の中では、夫が私のsanctuary（聖地）だったのよ。

あの頃の私は、まだ生まれていない状態だったと思う。だから、夫が「米国に残るぞ」と言うと「ハハー」と三つ指ついて、（夫が）「郊外へ行くぞ」と言うと「ハハー」と三つ指ついて。夫からは、「僕に精神的に依存していない？」のようなことを言われたことがある。飲びも悲しみも全部人のポケットの中に入れてしまうような生き方をしていた。「良い嫁」から今の「弾けた妻」に変身したのは、田舎町に越してから。それまでは夫のお金で生きていたけど、夫の会社辞めます宣言で、自分の頭で考えるようになったの。

「何がきっかけで生き方を変えることが出来たのですか」と尋ねた。

それはすごい問題に次から次へとぶつかったからです。今まで夫は神様だったのに、神様じゃないことに気づき始めたのよ。要するに、彼一人では解決できないことがたくさんあるんだなって気がついたの。それまでは気がつかなかったの。なんで自分が苦しいのか、どうして自分が自由さを感じないのか。だって、みんな自分の世界しか知らないでしょ。人が生まれた時のawareness level（気づきのレベル）は、それぞれ違うと思うのね。育てられた環境もあるでしょうし、持って生まれたspiritual

level (精神のレベル) も違うと思うのね。私の場合、幸か不幸か、未熟児状態で結婚生活を始めたから、cradle (揺りかご) の中で「ミルクちょうだい！いい子にしているから！」みたいな状態でした。

だけど、子供の学校のこととか、本当にシンドイことになった。．． (中略) ．．．私もあの時鬱だったんだと思います。．． (中略) ．．． そういう時に仕事を始めました。当面の不安材料はお金だったから、そこで不安をバネに自分の足で歩き始めました。

筆者は、夫からのサポートの有無を尋ねていたのだが、Cさんはむしろ夫をサポートする立場に立っていた。「それまで三つ指ついてご主人に依存していたあなたが、どうやって自分の中から強さを呼び起こしたんですか？」と尋ねた。

それは、経済が教えてくれたんです。同時に、夫だけに経済を任せるのは不公平だなと思いました。．． (中略) ．．． 友達の紹介で、日本語のレッスンを受けたという人が現れたり、折り紙を子供達に教える仕事とか出てきた。あの時もらった20ドル、冷蔵庫に貼りました。もったいないから使えませんでした。あれが私のスタートでした。驚きですねえ、あそこからだったんですねえ。

米国郊外に引っ越すまでのCさんは、自分が感じていることを表現する方法がわからず、無理をし、胃がよじれて倒れてしまうとか、血尿が出るなど爆発の形で自分を出していた。「あなたは、アメリカに移住したことで遺伝子のスイッチが入った」と日本の友達に言われた。「スイッチがあることさえ知らなかった私が、気がついたら、足で蹴飛ばしてスイッチが入ってしまっていました」。変身したCさんを、ご主人はどう思っているか尋ねると、「夫に『昔の(精神的に)依存していた君はどうしたの?』と聞かれて、『食べちゃった!』って答えた」と語った。

来客接待

Eさんは、「ご主人のサポートは？」という筆者の質問に対して、「妻から夫へのサポート」と勘違いした。

大変でしたよ！帰りは遅いし、週末は接待。しょっちゅう日本からのお客さんを自宅に連れて来て、私は6人分とか、10人分の食事を作っていましたからね。お酒を飲むから、帰りは私が運転してホテルまでお送りしたし。泊まっていく方もいましたよ！

研究者が「いえ、Eさんがご主人をサポートしたかではなく、ご主人のサポートがあったかということを伺いたいのですが．．．」と正すと、「そんなもん、ありませんでしたよ！」と即答した。但し、「子供の学校が小中高校と3人バラバラで、朝私が一人で（運転して）3カ所に送るのが大変だったから、夫が1人を高校まで送ってくれて、助かりました」と、夫のサポートがあったことを認める言葉も聞いた。

7. ステージ 4: 自分の居場所探し

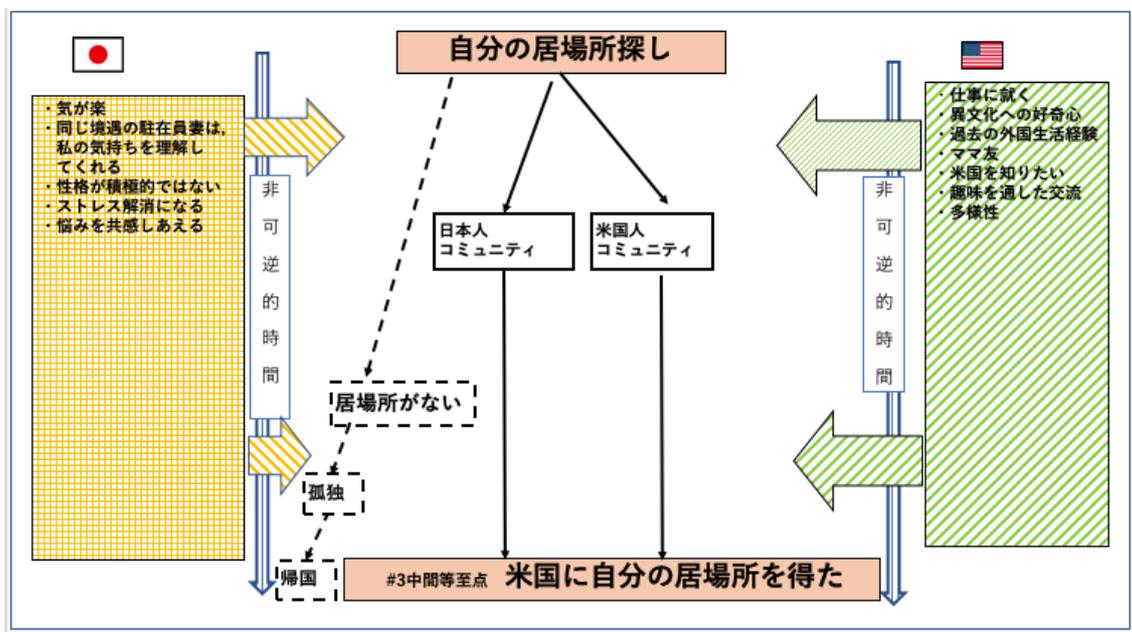


図5 ステージ4 「自分の居場所探し」

海外駐在妻が異文化に適応する重要な要因の一つに「居場所探し」がある。海外で暮らす妻にとっての居場所は単に時間を過ごす場所ではなく、寂しい気持ちを癒すオアシスであり、仲間から心理的サポートを得る場であり、精神的健康を保つ場である。海外での妻の居場所づくりは、異文化適応と生活満足度に深く関係する重要な課題であると考え、「外国での居場所みつけ」の体験過程を尋ねた。語りを聞く前、ステージ4では「日本人コミュニティに属するか、米国人コミュニティに属するか」の間で葛藤があることを想定したが、語りの中で葛藤は聞かれなかった。複線径路等至性モデル4（図6）左寄りに描かれているのは日本人コミュニティに居場所を見つけた人々の径路、右寄りに描かれているのは米国人コミュニティに居場所を見つけた人々の径路である。それぞれ進んだ径路は分かれたが、いずれの人も「米国で自分の居場所を見つける」という中間等至点に到達している。日本人コミュニティ参加を促進する力には「語学・性格・趣味・子供の学校関係・労働許可を得られない・ソーシャル・サポート・気が楽・辛い経験を理解してもらえ

る」，米国人コミュニティ参加を促進する力には「語学・過去の外国生活体験・外国への好奇心・子供の遊び仲間・子供の学校・子供のスポーツ・子供の言語・地域環境・仕事・スポーツ・趣味・労働許可」を抽出した。文中，日本人コミュニティを表す言動を____（下線），米国人コミュニティを表す言動を [] （網がけ）で示した。

7.1 米国人コミュニティ

趣味

Aさんは2つ目の赴任地I国に駐在していた時，3人目の子を出産した。当時，子供の幼稚園を通じた現地人の友人の他に，自分と同じ日本人駐在員妻の友人と親しくしていたが，友人は夫の仕事で突然帰国してしまった。その友人とは本当に心が通じていただけに，友人が突然いなくなってAさんの心にはポツと穴が開いた。「外国にいと，日本人の友人の突然の引っ越しって，動揺しますよね。辞令が出たら引っ越しまで2週間でしょ？私は相談する相手を突然失ったんです」。当時色々な問題が出てきたが，誰にも相談できずにいたAさんを支えてくれたのは，現地の友人であった。その後，4カ国目の駐在地K国ではそれまで自分が習得していた言語とは異なる言語の国だったことから，今後色々な言語の国に移動することに備えて，Aさんは新しいコミュニケーション手段として陶芸を始めた。

外国人はdiversity（多様性）に慣れ親しんでいるから，こっちが壁を作っていたら入れてくれないでしょ。だから自分から入っていかないとね。陶芸を始めたのはその為で，お蔭で言葉がなくても仲間に入っていました。陶芸ならこの先世界のどこに行っても通じるって考えた。「居場所を見つけた！」って感じ。

その後米国に赴任した時、Aさんは、「子供達の学校が落ち着いたら、すぐに陶芸の学校に行って、そこに居場所を見つけました。陶芸をやるのに国境を気にしないでいいですからね。陶芸が共通の言葉だったんです」。

仕事

外国駐在員の配偶者が就労ビザを取得することは難しい。例え労働許可を取得しても、夫の会社が許可しないので、駐在員妻は仕事に就けない。そのような状況下、駐在地で仕事に就いたBさんは特殊なケースである。BさんはM国で生け花を教え、米国では日本語教師の職に就いた。

M国では、Board of Education（教育委員会）のナイト・クラスで17年間生け花を教えました。当時日本はバブルで、上昇気流に乗って日本の文化がもてはやされていました。クラスでは生け花だけではなく、色々日本の文化についてのレクチャーもしました。お花のショーを催してそこに市長を招待したり、コースを終えた人たちが支部をつくってショーをやったりしました。15人のクラスが3つあり、アシスタントもいました。常に45人分の季節の花を準備することは大変でした。そのうち30エーカーの土地を購入して、そこに生えている花や木の枝を自由に切り出すことが出来るようになって楽になりました。

お花を中心に人生が動いていて、人生に花が咲いたようでした。夜7時のクラスに間に合うように、朝から準備して動いていました。（夕方）ベビーシッターが来た時には、全員寝る準備ができてるようにしていました。メソメソする時間がなかった。子供がいたから目標に突き進む原動力になったと思います。

米国に移動後は就労許可を取得できずにいたが、ある日新聞で「日本語教師が不足」という記事を読んだことがきっかけで、大学院で日本語教授法の勉強を始めた。修士号及び

博士号を取得し、企業や大学で日本語を教える仕事に就いた。Bさんは外国で暮らしている約40年間日本の文化に関わる仕事に就いたが、リタイア後はゴルフ、テニス、教会の世話役、読書会、大学の講義を受講するなど、100%米国人コミュニティの中で米国人として暮らしている。

田舎に引っ越し

Cさんの居場所は、夫の「会社辞めます」宣言で大きく変わった。それまでは、帰国した時すぐに適応できるようにと日本人コミュニティの中で暮らしていた。しかし夫が（日本の）会社を辞めたことを機に、Cさんは日本人が住まない米国人コミュニティに溶け込む努力をし、仕事を探した。それから18年経った今、Cさんは米国人コミュニティの中で多くの居場所をみつけている。

自分を大きく変えてくれたのは、ジムで出会った南米の踊りズンバ！

ズンバはもともと南米の踊りだったけど、音楽の先入観を捨てて他の国の音楽に合わせて踊った事で国境のない踊りになったの。ズンバに出会った事で、自分は大きく変わったと思う。「他人がどう思うか」は大事じゃない。「たった一度の人生どうして楽しまないの？」という気持ちになった。

地域の「モーニング・カップ・グループ」の仲間の国籍はバラバラ。ジムで出会った友人も、（人種は）多様です。

Cさんは現在仕事を5つ持っているが、そのうち3つは日本文化に関連している。国境を越えて米国で受け入れられているズンバと同じく、Cさん自身も国境を越えた居場所を見つけることに成功している。

今の私を支えているのは、日本人としての私がここ（米国）でやるべきことをみつけたからです。だから、私がここにいる意味があるんですよ。私にしか出来ないことがあるから、私はそれをやり続けられる限り、ここにいたいと思っています。

子供を通じた交流

Fさんは、米国行きが決まった時から「米国人の友達をつくる」と決意し、米国に赴任してからすぐに近所の人たちに溶け込もうと努力した。

近所のYMCAに子供を入れて、そのお蔭で子供は（現地の）プレイ・グループに入ることができました。お母さんたちも含めて米国人グループと週に1、2回一緒に過ごしたり、自宅にも招きました。グループの大部分は白人でしたが、黒人もいました。子供がいたお蔭で交流ができたんだと思います。

7.2 日本人コミュニティ

心理的サポート

Eさんは、日本人コミュニティに居場所をみつけた一人である。1回目の海外赴任地S国で病気になった時も、米国で苦しい思いをした時も、Eさんを支えてくれたのは日本人の駐在員妻であった。

夫が出張の時だね、転げ回るくらいお腹が痛くなったんです。病院に行ったけど、（原因が）わからないって。支店長の奥さんが日本人の医者に連れて行ってくれたら、「ストレス」と言われました。一時帰国の時病院に行くように言われたけど、日本では痛くならなかったんです。

2度目の赴任で米国で暮らしていた時は、子供が学校で無理をし過ぎて悶々としている時があって、母親としては見ているのが辛かった。その時、子供の補習校のお母さ

んが支えてくれました。私が「家を出たくない」って言ったら、「うちに来て」と誘
ってくれて. . . 子供が帰るまでの間, いろんな話をしました.

趣味

Gさんは趣味を通して日本人コミュニティに溶け込んだ。

初めは英語を頑張ろうと思いましたが, 結局, 趣味を通して日本人コミュニティと活
発に関わることになりました。夫の立場上, 私は(夫人として)もっとやらねばなら
ないこともあったんですが, 会社の人だと気を遣っちゃうから, やっぱり趣味を通し
た友達の方が多くなりました。趣味を通して日本人の友達に会えて, 楽しく過ごせ
て, そのお蔭でストレスがありませんでした.

Gさんが米国で出会った日本人の友達とは帰国後も交流を続けている。「外国で苦勞し
た愚痴なんかは外国で同じ苦勞した人と話し合えるけど, 日本人達とはそんな話はでき
ませんからね」。

8. ステージ5：帰国後・夫の定年後

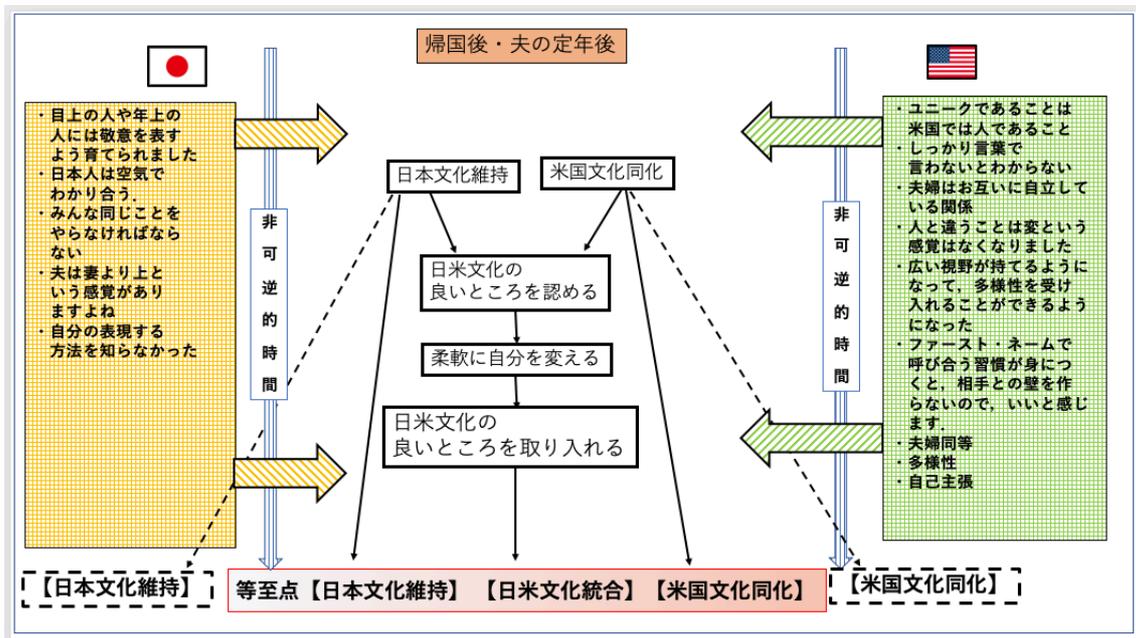


図6 ステージ5「帰国後・夫の定年後」

子供が自立するに至り、子育て・家族構築する親の役目はほぼ終わり、やがて夫婦のみの生活へと移行する。7人のインタビューの中には帰国した人は5人、米国に残っている人は2人いる。いずれも、米国で暮らして得た様々な経験と、海外生活を経ても維持し続けた日本的価値観が濃縮された形で一人一人の心の中に混在している。研究協力者の体験過程の語りから、米国文化から受けた影響、日本文化維持へのこだわり、日米両文化下で暮らして来て感じていること、米国に行って良かったと思うこと、帰国して感じるリエントリー・ショック、日本を離れて後悔したことなどに着目して複線径路等至性モデル5（図7）を作成した。複線径路等至性モデル左寄りに描かれているのは、「日本文化を優先し、日本的な考え方や価値観を維持」した人々の径路、右寄りには「米国文化を積極的に受容し、米国的考え方や価値観を取り入れた」人々の径路である。文中、日本文化の特徴と考えられること、日本を離れて後悔していること、帰国して良かったと考えていることを （下線）で表し、米国文化の特徴と考えられること、米国に駐在して良かったと

考えていることなどを (網がけ) で表した。ステージ5の葛藤は、「日本文化維持と米国文化受容」を抽出した。日本文化維持を促進する力は、「身を縮める・折り合いをつける・居場所・仕事・性別役割分担受容・親の介護」、米国文化受容を促進する力は、「仕事・居場所・自信・自立心・多様性・自由な自己表現・夫婦同格」を抽出した。

8.1 米国文化を受容

「米国人」になる

米国シチズン・シップ（市民権）を取得したBさんは、子供や孫との会話は英語、友人は全員米国人、読み、書き、思考全て英語だと言う。研究協力者の中で最も米国文化に同化している。そんなBさんは、外国生活20年目にして米国でカルチャー・ショックを体験したと言う。

知らない人同士でもファースト・ネームで呼び合う米国の習慣には戸惑いました。家族以外の人、特に目上の人や年上の人には敬意を表すよう私は育てられました。だから、米国でも、初めて会う人や目上の人には当然ファミリー・ネームで呼んでいました。ところが、そのことが事件を引き起こしました。博士課程の学生の時、私は Fellowship（フェローシップ）から奨学金をもらっていて、その代わりとして授業を受け持ったり、学部のスタッフ・ミーティングに参加していたんですが、その学部長に呼び出されたんです。私が彼女に対して「ドクター」という称号に続いてファミリー・ネームで話しかけるので、「私に対して何か嫌なことがあるから距離を置いているのか」と尋ねられました。私は、それはとんでもないことで、目上の人には敬意を表してファースト・ネームで呼ばないのが日本の文化で、決して距離を置きたいと考えているわけではないと弁明しました。その時の学部長の言葉はショッキングで、eye opener（目を覚まさせてくれる）になる経験でした。「私も日本に行ったら日本の文化に従って振る舞うだろうけど、米国で人に敵対視していないことを示したいなら、

他の人たちと同じように私のことを「ファースト・ネームで呼びなさい」と言われました。

以来、私は日本人メンタリティを切り離す覚悟をしました。初めは怖気づきました。でも、何年かするうちその習慣が身につくようになり、相手の年齢や肩書きにかかわらず自然にファースト・ネームで呼べるようになりました。今ではファースト・ネームで呼んだ方が自分と相手との間に壁をつくらないし、初めて会った人とも距離が近く感じられて、いいと感ずます。

Bさんに、外国ではどのような葛藤を経験し、それらをどのように乗り越えてきたのか尋ねると、次のような返事がメールで送られてきた。(原文は英語、筆者が翻訳)

「見知らぬ」ことにはいっぱい出会いましたが、どれも「葛藤」ではなく「チャレンジ」と受け止めて、乗り越えることに喜びを感じました。見知らぬ出来事にはたくさん遭遇しましたが、その度上手く対処出来たのは、5つの力のお蔭だと思っています。1つ目は私の楽天的な性格です。．．．(中略)．．．チャレンジが大きければ大きいほど乗り越える喜びを感じていたのです、わざと高い目標を設定して、それを達成することに大きな喜びを得ていました。2つ目は私も子供も健康であったこと、3つ目は夫のお蔭で経済的に恵まれていたことです。4つ目はプロテスタント信仰です。13歳の時に洗礼を受けて以来ずっと信仰は私を支えてくれています。5つ目は夫の並外れた寛容性と理解力です。夫は、私が幸せでいることが彼の幸せだと言い、49年の結婚生活の間ずっと私を支えてくれました。

性格の変容

Cさんは米国郊外で暮らすようになったことで、自由に表現する自分を見つけ、性格も変えるきっかけになったと語った。もし米国に行っていなかったらどうなっていたと思

うか尋ねた。「多分、精神異常になっていたと思う。（夫に従順な）三つ指も精神異常の表れだったと思う」という答えが返ってきた。米国の特徴について尋ねると、「アメリカ人は自分が確立していて、多様であると思う」という言葉が返ってきた。

「ユニーク」であることは、アメリカでは「人である」ことの原点です。日本で「ユニーク」であることは、「異端」という意味になるけどね。アメリカは、移民の子孫で成り立っている。移民に対してドアを開けていることが、国の隆盛につながっていた。日本人が自分のポジションを知るためには、アメリカを知ることです。そもそも、「違うことは敵だ」と感知するのは、原始的なリアクションですよ。原始人はそうやって危険から身を守ってきたからね。それが少しずつ「異なっても危険じゃない」ということを前頭前野が学ぶことによって、人類は原始レベルから向上して来たんです。．．．（中略）．．．「知る」ことは、「理解する」ことです。

日本人の特徴は何かと尋ねると、「空気を読むこと」と答えた。「アメリカ人は、しつかり言葉で言わないとわからないけど、日本人は空気でわかり合う、はっきり言わないのは面倒ですよ」。今後、帰国するつもりはないのか尋ねた。

日本に帰る現実が近づいていると考えると恐ろしい。震えています。日本に帰るミッションがないと、意味がない。理想は、ギリギリまでアメリカで働いて、死んだ後は灰にしてもらって、多摩川とハドソン川に撒いてほしい。子供達には「絶対私を重い石の下に押し込めないでね」って言ってます。

筆者が「死んだ後も、自由がいいんですね」と言うと、「そう、私のゴールは自由であることです。スピリットは自由に飛び続けていたい」と語った。

Eさんは、「普通スニーカーを買う時、日本人は『〇〇が履いているから欲しい』って言うのに、私の子供は『友人の〇〇が履いているからダメ』って言うんです」と、初めは我が子の個性化に驚いた様子を語ったが、Eさん自身も徐々に「個性化」を受容するようになった。「日本人は世間体を気にして、周囲に同調するのが美德と考えているけど、私は、他の人と違うことが『変』という感覚がなくなりました」と語った。

米国的「夫婦同伴システム」

米国では、ビジネスの集まりに夫婦同伴する慣習がある。そこでの会話は英語が中心になり、英語が得意でない人、社交的な性格でない人は、一人退屈な時間を過ごさねばならない。Gさんは、夫の仕事で度々同伴することが求められ出席したが、「（その場に行ったら）夫は私のことなんて放っていましたからね」と、米国の夫婦同伴システムに苦痛を感じた。

Dさんは、「夫婦同伴」の形は異なるが、このシステムを肯定的に捉えた。

私の両親は典型的・伝統的な日本の子育て（性別役割分担）をしましたが、うちの夫はバーベキューをよくやるの。あれは外国生活の影響ですよ。

日本では女性同士で出かける機会が多いけど、海外にいた時は（日本人駐在員）夫婦単位で食事に招いたり招かれたりした。（帰国してからも）海外で生活をした人と一緒にいると楽しいし、何より夫婦単位でのお付き合いができることがとても嬉しいです。それぞれ同じような年齢の子供たちを海外で育て、現在アメリカで生活している子供たちを持つ親だから、なおさら話が合うのかもしれませんが、もし夫婦で別行動が多い日本でずっと過ごしていたら、こんなことはなかっただろうと思うと、アメリカで生活できたことが本当によかったと思います。

30年以上の海外駐在の間ずっと夫は仕事で忙しく、家事や子育てにはほとんど参加しなかったと語ったDさんであったが、夫の退職後は二人で古民家のリノベーションや落花生づくりなど、夫妻共通の趣味を楽しんでいる。

妻の自立

Eさんに米国で暮らしてどのような変化があったか尋ねた。Eさんは結婚前看護師として働いていたが、1子が生まれた時、夫から「(子育ての)手伝いは出来ない」と言われ、仕事を辞めて専業主婦になった。帰国しリタイアした今、夫は地元でボランティア活動をし、Eさんはデイ・サービスで看護師として働いている。

日本人には、「夫は妻より上」という感覚が大いにありますよね。だけど米国から帰ってからは、今までと同じ関係を続けたら辛いと思ったんです。「夫婦はお互い自立している関係」と考えるようになりました。

マンションには会社関係の人が多くて、私が働きに行っていると聞いて、「昼ごはんとか洗濯とかやって、ご主人すごいじゃない」と言う人たちがいる。日本には、周囲に同調するのが美德のような感覚ってありますよね。昔の私なら世間体を気にしていた(仕事を辞めて夫に尽くす)かもしれないけど、今は「人に迷惑をかけなければいいじゃない」と考えるようになりました。「人と違うと変」という感覚はなくなりました。

海外に行って良かったと思っている。日本にいたら多様性がなかった。子供の結婚とか、仕事とか、受容できなかったかもしれない。日本人は、型にはまっていないと受け入れられない。外国にいたから、(私は)広い視野が持てるようになって、多様性を受け入れることができるようになったと思う。

8.2 リエントリー・ショック

Aさんは、「どこの国に行っても心理学なら人間のことを勉強するのだから役に立つと思って、心理学を勉強しました。人間を知ることが私にとって大事です。自分の中で温めてきた人間に対する思いが、今もずっと継続している感じです」。外国では十分に人と理解し合えたAさんであったが、日本では様子が違ったと言う。外国で生まれた3子は長期にわたる海外生活の末、親と一緒に帰国した。Aさんは、子供が日本の学校へ行くようになってショックを感じたと語った。

J国でもK国でも、子供達は現地校に通っていました。国境をつくらないという意識が私にはあったから。子供達も好奇心いっぱいだった。外国で生まれた3子は米国で現地校に行って、何とかなっていたんだけど、日本ではちょっと違った。日本人は異質な人への対応が外国人と違う。日本人の子供は生まれた時から空気を読んでいるでしょ。だから、帰国子女はKYと思われちゃうんでしょうね。日本では、皆同じことをやらねばならない。日本人の集団主義って、空気の中にあるんですね。

Aさんは日本では身を縮めることで周囲に合わせる努力をしていると語った。

8.3 日本文化を見直す

Gさんは、帰国してから和裁を楽しみ、外出時は出来る限り着物を着ると言う。「長い外国生活にも関わらず帰国してから日本のものがないと思うのは、外国生活があったからでしょうか」と筆者が尋ねると、「それはあったと思いますね」と答えた。

Aさんは「どこの国に行っても理解し合える道具」として海外赴任中陶器を始め、帰国してからは陶芸教室を開いている。「Aさんのつくる陶器には、日本の文化が感じられますね」と筆者が言うと、「日本から初めて出る時、日本の文化を紹介する為に岡倉天心の本を読んだんですが、それが日本の文化を紹介するのにすごく参考になった。前から興味

はあったんだけど、日本に帰ってきてからお茶を始めた。お茶を習ったことが、今の陶芸に反映されていると思う」と語った。

第8章 考察

7人には7つの異なる人生があった。研究協力者の日本人駐在員妻7人は全員共通の必須通過点（「家族と共に夫の米国駐在に同行する」）を出発し、折々共通の中間等至点を通過しながらも、それぞれ異なる葛藤を経験し、それぞれ異なる対応をし、7人7様の径路を進んだ。そして、最後は全員が【日本文化維持～米国文化受容～米国文化同化】という幅の広い等至点にたどり着いた。複線径路等至性モデルを通して見えたのは、米国滞在中様々な葛藤があり、それら葛藤は日米両国の文化・社会・歴史の影響を強く受けていることである。異文化受容は、個々人の適応能力に拠るところが大きいので、そのプロセスは多様であったが、共通点も見えた。共通点一つ目は、研究協力者は海外生活のどこかで必ず「葛藤」に遭遇し、そして葛藤を乗り越えたことである。二つ目の共通点は、葛藤に遭遇するたびに状況に合わせて自分を柔軟に変化させ、多様性を身につけ、やがて滞在国の文化受容に到達したことである。

1. ステージ1 米国赴任を決意する

1.1 親の介護

ステージ1の課題は「米国赴任を決意する」で、葛藤は「海外駐在に同行するか、日本に残るか」の選択である。海外赴任に同行に対して消極的である理由の一つとして、「親の介護」がある。三善がクアラルンプール在住の日本人駐在員妻を対象に行った調査でも、駐在員妻の中には「親の介護」を理由に一度は海外赴任に同行しないことを検討した人がいたことが報告されている³⁵⁾。箕浦の調査でも、米国赴任のことを初めて聞いた妻の32%は否定的に受けとめており、その理由の一つとして「家族に病弱な者がいて健康管理に不安がある」が挙げられている⁵³⁾。「日本に残って親の介護をするか、親の介護をせず外国に移住するか」という葛藤には、どのような文化的・社会的・歴史的意味があるのか。その答えの一つとして考えられるのが、儒教である²⁵⁾。「親孝行」は儒教の重

要な教えの一つであり、その教えは日本人の価値観の中に組み込まれている。親が年を重ね、自活することが困難になった状態を見て子供が介護をしないことは、苦しみになるのではないかと考える。又、戦後家制度が廃止されるまで、夫の家に入り舅姑に仕えることは嫁の役割とされ、周囲も嫁が役割を全うすることを期待した。その嫁としての役割を全うしないことに対して、罪悪感を持つのではないかと考える。「年老いた親の介護をしたい」という思いやりの心の背景には、Markus & Kitayama が論じる、「慈悲を説く仏教に起源を持ち、他者との共感的な関わり方に価値を置く集団主義的価値観」²⁷⁾があることが考えられる。海外に居て親の介護が出来ず、何年も施設で暮らす親の気持ちを想うと、切ない気持ちになるであろう。特に夫が長男であり、妻自らが長女である場合、周囲に期待される役割に対する責任感と、果たせない罪悪感は一層強いことと考えられる。

Eさんは、介護を必要とする親を残して日本を離れる決心が出来ないでいたが、背中を押したのは「家族がバラバラになりたくない」という、家族の気持ちを優先した価値観であった。しかし、海外にいる間親のことを心配する気持ちは変わらず、介護をする為に夫より1年前に帰国した。「(見舞いに行けて) ホットした」、「(母が88歳の時) 妹と温泉に連れて行ったんです。すごく喜んでくれてね。それをやったから後悔していません」、「夫が帰国して定年退職してからは、毎月夫婦で親の見舞いに行った。『これが私たちの仕事だね』って、6年間そういう生活をしました」と、安堵した気持ちを語った。

Bさんも、「日本の親の面倒を看られなかったことは心残りです。毎年お見舞いに帰ったけど、むしろ母に励まされた。私は母の喜ぶ顔が見たくて PhD にチャレンジした気がする」と語った。Bさんは海外に住んでいる為に親の介護が出来ないことは心残りであったが、「学問」という代わりの方法を以って母親を喜ばせ、同時に、自分の心の痛みを癒した。田中が行なった、米国に住む一日本人女性のアイデンティティ変容を追う22年間の縦断研究でも、研究協力者は日本に住む母親が病気になってからは「両親の子供」であることを強く意識するようになり、機会がある度に親に会いに行った³⁸⁾と報告されている。

「老親を慕う子供の気持ち」が集団主義的文化圏や仏教文化圏の人々だけに備わっているのか、または文化とは関係なく普遍的な感情であるのかは、本研究では明らかにすることはできなかった。しかし、少なくとも本研究の協力者の中には、長期間米国で暮らしても、親が介護を必要としている時に駆けつけることが出来ないことを苦痛に感じている人がいることは、駐在員妻の心を理解する上で重要なことだと考える。「海外に居る為にやりたくてもやれない介護を、周囲は理解してくれない。『海外（生活）いいですね』と言う人に聞かせたい。『（海外）駐在は楽しいでしょう』と人に言われるけど、介護したくても出来ないことを理解して欲しい。『親が危篤』と言われてからでないと帰国出来ないんですからね。親の最期を看取れないのは海外赴任の宿命です」という E さんの言葉は、海外駐在員妻の葛藤の意味を理解する上で見逃せない。

1.2 過去の成功体験、海外生活体験

葛藤を乗り越える為に本研究協力者が無意識に用いた効果的な方法が、過去の海外生活や成功体験である。B さんは高校時代、自らの意志で米国に留学した経験を持つ。留学当時、留学先の田舎町では日本人はまだ珍しく、B さんは日本について講演するチャンスを与えられ、大役を果たした。結婚後 2 つ目の新赴任地 M 国では、現地の人に生け花を教えるという仕事に挑み、成功を収めた。米国赴任後は、大学院で修士号・博士号取得にチャレンジし、いずれも目標を達成した。B さんの強い精神力は元々備わっていた個人的資質であることも考えられるが、二十数年前まで戦争の敵国であった米国で米国人聴衆を前に日本を紹介する講演を成し遂げた成功体験は、その後の B さんが様々なチャレンジを乗り越える力になったことが考えられる。外国駐在員の異文化適応の研究でも、「過去の外国生活体験」は、異文化適応の重要な要因として挙げられている⁵³⁾。

1.3 選択権

海外赴任が自発的か強制的かにより、滞在国における異文化受容度は大きく左右される。Aさんは結婚後、夫と共にH国に赴任する際仕事を辞めた。「仕事を辞めたことに後悔はないですか」と尋ねると、「仕事を辞めたのは私の選択でした。『行かない』という選択肢もあった中で、『行く』と決めたのは自分ですから」と、自らの決断に後悔が感じられなかった。Bさんは、1つ目の赴任地L国からM国へ移動した時は、目指していた修士号取得の道半ばだったので悔しい思いをしたと語ったが、M国から3つ目の赴任地米国に赴任する時の語りでは、後悔の言葉は聞かれなかった。M国では、「生け花のお蔭で人生に花が咲いたようだった」と語る程充実した生活を送っていたにも関わらず、その地を離れる後悔の言葉がなかったのはなぜか、そこには、「選択」の有無の違いがあることが考えられる。M国から米国へ赴任する時は、会社から「次は日本か米国か」の選択肢を与えられ、夫妻で相談した結果米国行きを選択した。会社から押し付けられるのではなく、自発的な赴任であったことがBさんの覚悟を生み、米国生活受容を後押ししたのではないかと筆者は考える。駐在員妻の適応要因を調査した研究でも、社命で外国赴任する勤労者と比べると、勤労者妻のモチベーションは低いと報告されている⁵⁵⁾。夫の海外駐在に同行することを自ら選択することで、駐在員妻は責任感と覚悟を持つようになり、その後滞在国で困難な状況に遭遇しても、克服しようとするレジリエンスにつながると考えられる。

2. ステージ2 子供の教育の選択

2.1 状況に合わせて決断を柔軟に変える

海外駐在の一番の隘路は、子供の教育問題だと言われて久しい。滞在が長期化するにつれ日本での受験を諦める人、米国にいる間は自由な現地校の教育を楽しむことを優先する人、日本語の保持は補習校に通わせるに留める人、外国にいても「日本に追いつき追い越せ」式の受験意識の強い人など、子供の教育選びには家族によって異なる。本研究の協力

者の中にも、選択に迷っている姿が見えた。「米国滞在中、米国の文化文法の行使者と一日の大半を学校で一緒に過ごし、家や補習校では日本の文化文法を使う者と一緒に過ごす日本人の子供は、日米どちらの文化文法を学ぶのか」と箕浦は問い、その答えとして「異文化同化過程に関与している要因には、年齢・性別・性格などの個体の属性に関する変数と、滞在期間・家庭環境・ソーシャル・ネットワークなどの文化化の行われる場の条件に関する変数との二種類が考えられる」と論じた⁵³⁾。子供の学校の選択は親の価値観に基づき、その時最善と考えられる選択をするが、海外駐在期間は定まっていないことが多く、駐在期間の長期化・子供の年齢・子供のアイデンティティの変化・優先言語の変化などに沿って、親は選択のやり直しを求められる。ステージ2の課題は「子供の学校選び」で、葛藤は「日本語教育か、現地教育か」の選択であるが、その葛藤は「自文化維持か、滞在国文化受容か」の選択と言い換えることが出来ると捉えた。

Bさんは1子が3歳の頃、保育園でポーっとしている我が子の様子を見て英語を教え込んだ結果、子供の英語力は瞬く間に上達したが、代わりに日本語が弱まった。この状況を見て、Bさんは「英語で考えればいいか」と柔軟に価値観を変えた。Cさんは、初めは帰国後すぐに適応できるようにと子供を日本人学校で学ばせていたが、夫の転職を機に日本人がほとんどいない郊外に引っ越し、子供を現地校に通わせ、補習校で日本語を維持させた。Dさんは、子供が幼い時は「私も夫も日本人なので、日本の考え方を伝えよう」と考え、「義務教育までは日本語」で教育する決意をしたが、滞在期間が長期化するに従い、また子供の年齢に合わせて、教育言語を日本語から英語へと変更した。このように、状況に合わせて変更する柔軟性こそが、人が周囲の環境に合わせて進化するのに必要な能力だと考える。柔軟性がなければ、進化は起こらない。

長期間外国で暮らしても、子供に日本語教育を選択する海外駐在員の心の意味は何か。

Dさんは子供が幼い頃は「私も夫も日本人なので、日本の考え方を伝えよう」、「義務教育までは日本語」と、日本語で教育する決意をした。Fさんの場合、米国駐在の初期は子供の年齢が低かったので英語教育を受けさせ、帰国後は「普通の日本人として育てたかっ

た」ので日本語中心の教育へと切り替えた。子供の教育を選ぶのは親の価値観に依るもので、価値観を説明することは容易ではないが、外国において日本語教育を維持することの説明の一つとして、上野が次のように書いている。「文化間にはハイラーキがある。欧米人は自らを最優位の文化と信じているから、どこの文化圏へ行っても自国の流儀で通すという植民地主義を通した。日本人の子供の現地校への通学率は第三世界圏では極端に少なく、日本人コロニーをつくってその中で暮らすことが当然視されている。日本人はかつての欧米の植民地主義者と同じ域に達しつつある」⁵⁶⁾。しかし、海外駐在員が子供に自国の言葉を習わせようとする行為は果たして植民地主義であるのか、筆者は疑問に感じる。自国の言語維持と植民地主義観念の関係については、更なる研究が必要であろう。

2.2 子供の選択を尊重する

親の価値観を子供が素直に聞き入れるのは中学生までで、高校生以上になると子供は自分の価値観に沿って学校を選択する。特に米国の学校で、「自分の意見を持ち、自己主張する」ことを教えられた日本人の子供たちは、黙って親の意見に従うのではなく、自分の考えを主張する。自己主張することに価値を認める米国で生活する親も又、子供の自己主張を受け入れ、子供の選択を尊重する。Aさんの3人の子のうち1人は中学まで現地校で学んでいたが、高校は自らの意思で単身日本の学校に進む選択をした。Gさんの3人の子供のうち1人は、米国の高校を卒業後日本の大学に進学したが、「合わない」と、米国の大学に移ることを選択した。頑なに親の価値観を踏襲しているだけでは進化が生まれない。自立した我が子の意思・選択を受け入れることでヒトは新時代に適応し、次なる次元へと成長する。

3. ステージ3 夫からのサポート —性別役割分担—

3.1 性別役割分担の現状

夫のサポートの有無は、家庭内の夫妻間ダイナミクスと家庭内性別役割分担と関連する。日本社会では1992年以降、共働き世帯の数が専業主婦世帯数を上回った⁵⁷⁾が、家庭では家事労働が夫妻平等に分担されていない。その裏付けとなっているのが家事関連時間の夫妻間比較で、妻5.02、夫0.47という数字は⁵⁸⁾家事労働が平等に分担されていないことを示している。外国との比較では、内閣府が実施した「6歳未満の子供を持つ夫の、1日あたりの家事・育児関連時間」の日米比較調査の結果、日本は83分（うち育児時間は49分）、米国は190分（うち育児時間は80分）で、日本の夫は米国の夫と比較して家事・育児に時間を費やさないとわかる⁵⁹⁾。平日における父子の接触時間については、日本人は「1時間くらい」と答えた人が22.4%で最も多いが、米国人は「3時間くらい」と答えた人が20.3%で最も多い^{同上}。さらに、子供との接触時間が「ほとんどない」と答えた人の割合は日本で18.8%であるが、米国ではわずか0.9%である^{同上}。

3.2 海外駐在員の夫妻間ダイナミクス

日本人海外駐在員の家庭では、夫は滞在国文化の影響を受けて家事育児に参加し、夫婦間のダイナミクスは変容するのか。マニラ駐在の日本人駐在員妻を対象にした「海外生活における家族関係」の調査によれば、「助け合う経験をしたことで、あらためて家族なんだと実感している」、「子供に親の背中を見せることができ、子供が親を尊敬するようになった」、「主人が子供の学校行事に参加するようになって、子供と主人の距離が近くなった」など、家族関係がお互い近くなったという回答であった⁶⁰⁾。夫妻関係については、「主人との関係が密になった」、「夫婦の絆が強くなった」、「夫婦で会話する機会が増えた」「旦那さんと一緒に行動する時間が増えた」など、夫を身短かに感じているという回答があった^{同上}。

日本人妻群，海外駐在員妻群，米国人妻群が描いた「家族イメージ図」をデータ化し3群比較した皆川の研究では，「夫妻同じパワー」とイメージした日本人妻群は16.7%，駐在員妻群58.3%，米国人妻群45.4%という結果が得られ³⁹⁾，そのことから駐在員妻は米国人妻以上に「夫妻同等」とイメージしていると捉えることが出来る．しかし，夫妻間のダイナミクスに影響を与えるのは文化の違いだけではなく，世代の違いもある．日本では共働き世帯の割合が専業主婦世帯の割合を抜き，若い人たちの家庭では家庭内労働は「妻主体」から「夫妻共同」を理想とするように変わっている⁵⁷⁾．子育てが終了した年齢を設定した本研究協力者が捉える夫妻のダイナミクスは，果たして一昔前の日本的な夫上位のタテ関係か，又は，米国的かつ現代的なヨコの夫妻関係か，そしてその背景にはどのような社会的・歴史的意味があるのか．筆者が本研究協力者に「海外では，ご主人のサポートはありましたか」と尋ねた意図は3つあった．1つ目は，外国生活では夫のサポートが妻の精神的健康度に影響を与えるか否かを確認すること，2つ目は，箕輪が「日本的でもない米国的でもない，第3の文化ともいえるべき特異なライフスタイル」と称する⁵³⁾ 駐在員家庭において，研究協力者の夫妻間ダイナミクスは，日本的なタテ関係と，米国的ヨコ関係と，どちらの文化を反映しているのかを確認すること，3つ目は，夫妻同等の新しい夫妻関係と，夫上位の古い夫妻関係の両方を見て来た本研究協力者が，自分の選択した役割に対しどのように感じているか，心の意味を尋ねることであった．

3.3 夫からの解放

海外駐在員の家庭では，たいてい夫は仕事や接待で帰りが遅く，週末は出張やゴルフで家を空け，駐在員妻は海外で仕事に就くことが会社に禁止されているので，結局妻が家事労働を一人で担当することになる．研究協力者7人中6人が「夫からのサポートはなかった」と語ったが，夫（父親）が「家族をサポートしなかった」ことを，妻は否定的に捉えていない様子がインタビューの中で聞かれた．

「海外駐在中、夫のサポートはありましたか」という質問に対して、Gさんは「全くなかったです」と答えた。父親から子供へのサポートは、「子供が米国に行った当初は英語ができないから、もっと（父親として）サポートしてくれればいいのにと思っていたけど、子供は父のサポートがなければ勝手にやっていた」と、肯定的に捉えていた。夫から妻へのサポートについては、「（サポートが）ないのがよかったかも。だから私は好き勝手にできたからね」と、やはり夫のサポートがなかったことをよい結果と結びつけて語った。Bさんも、「私は私で好きなことができたから、夫の犠牲になったなんて考えたこともない」と語った。夫からのサポートがない代償として、駐在員妻は自由を享受出来たと理解した。

3.4 妻の自立

Eさんは、「ご主人のサポート」を「妻から夫へのサポート」と誤解し「大変だった！」と答えた。駐在員家庭ではよく見られる光景だが、夫は週末会社の人やその家族を自宅に招待し、妻は買い物やご馳走作りに走り回る。そのことを、Eさんは「駐在中ずっと夫をサポートしてきた」と語った。しかし最近になって、米国人と結婚し、米国で3人の子供を育てている娘が、「あの頃（米国駐在中）のお父さん、仕事が大変で家族の世話なんてできなかつたよね」と、父親に共感する言葉を発したと言う。家族の一員から父親の苦勞をねぎらい、父親を肯定する言葉を聞いたことは、Eさんの気持ちを肯定的に塗り替えていることが考えられる。インタビュー最後には、「日本人には『夫や妻より上』という感覚が大いにありますよね。でも、私は米国生活を通して「『夫婦はお互い自立している関係』と考えるようになった」と、米国的に「夫と妻は同等である」と捉えている気持ちが語られた。

Cさんも、米国生活を経て自立した妻へと返信した。結婚以来ずっと夫に依存し、夫の言うままに生きてきた。しかし、夫の突然の「会社辞めます」宣言で、依存的だった自分が「夫を支える妻」に変身した。それまで何も考えず夫のお金で生きていたが、米国で

暮らし、自立した米国人と交流したことで、「私有家計を支えなければいけない」という責任感と不安をバネに、自立した妻へと変わった。米国社会で働き、米国人コミュニティに居場所を得たことが、Cさんの変身を導いたと考えられる。

3.5 性別役割分担の積極的受容

Dさんは、海外駐在中の夫のサポートについて、次のように語った。「海外では助け合う相手は夫だけでしょ？でも、夫はよくゴルフをしたから、自分はゴルフ・ウイドウになったの。でも、日本では男と女の役割は別だと感じています。子育てに関しては、（日本では）男女役割分担がしっかり分かれていると思います．．．（中略）．．．家族を守る、子供を育てるのは私の仕事だと割り切って、誇りを持っています」。子供の頃から父親の仕事の為外国で暮らした帰国子女で、結婚後は海外駐在を繰り返す、人生の半分以上を外国で暮らしている自称「コスモポリタン」のDさんが、日本の伝統的な価値観である「性による分業」を積極的に受容し、誇りにさえ感じていると言う。言葉の背景にある「意味」を探ろうとインタビューを続けたところ、「私の両親は典型的、伝統的な子育てをしていたから、私も同じにしてきました」という答えを得た。Dさんに男女役割分担という日本的価値観を受容させているのは、「親の価値観の踏襲」であることが考えられる。また、「周囲から期待される役割や努力を志向する」集団主義的な考え方は、「規範や役割を重んじる」儒教的価値観も影響していると考えられる。三善は、駐在員妻は海外では本国での場合にも増して「良き妻として後方補佐に慢心し、性別役割を貫徹することが期待される」と分析している³⁵⁾。周囲から期待される「～らしさ」に応じて自分を合わせる「集団主義的思考」は、Dさんの言動の基盤になっていると考える。さらに、「集団主義と儒教」を合わせた「良妻賢母」という理想像に自分を近づけることに、誇りを感じている気持ちが表されている。

Dさんと同じように家庭内性別役割をすすんで受容しているのは、Bさんである。Bさんは40年以上海外に住み、「読み、書き、話し、考えるのは英語」で、研究協力者の中

で最も「米国文化同化」に近い。又、「母はリベラルな考え方をされていて、男女区別なく育てられた」と語っていたので、夫妻関係も米国的な男女平等を想定したが、想定に反して家庭内性別役割分担を積極的に受け入れていた。「自分も忙しかったし、私一人で子育てすることを当然だと考えていたので、夫がサポートしてくれなくても苦に思わなかった」、「私は私で好き勝手にすることができたので、夫が家にいなかったことで、夫の犠牲になったとは考えたこともない」と語った。この発言を理解する鍵となるのは、「(私は) 家族以外の人、特に目上の人や年上の人には、敬意を表すように育てられた」という言葉である。Bさんの母親はリベラルな人であったが、子供に規範や役割を重んじる儒教的なしつけをしていたことが察せられる。幼い頃親から教えられ一度身につけた価値観は、長期間の外国生活を経ても変わらないことが理解できた。

4. ステージ 4 自分の居場所を見つける

海外駐在員妻のメンタル・ヘルス上の特徴には、まず「孤立しやすいこと」が挙げられる⁶¹⁾。夫である勤務者には仕事で自ずと社会的つながりが存在するのに対し、妻は意識的に社会的つながりを形成しない限り容易に孤立に陥ってしまいがちになる^{同上)}。駐在員妻は居場所を見つけることが異文化ストレスを縮小し、精神的健康度が高まる。駐在員妻の赴任地での適応の成否は駐在員本人の仕事の成否を左右するとされて久しい³⁴⁾。

Herleman, Britt, Hashima の駐在員妻の居場所とストレスとの関係についての研究論文は英文で書かれているが、「居場所」は「Ibasho」とアルファベットで綴られている⁶²⁾。Herlemanらは「Ibashoとは、日本文化固有の概念で英語に訳すことは困難であるが、あえて訳すなら niche という英語が一番近いだろう」と説明し、Ibashoを「人が定期的に訪れ、快適に感じ、心理的に安全に感じる場所」と定義づけている^{同上)}。「人は niche があれば快く感じ、元気になり、継続性を感じることができる。駐在員妻は、滞在国に居場所を持つことで異文化適応度も生活満足度も上がるが、反対に居場所がなければストレスを感じ、うつ的気分になりやすい」と結論付けている^{同上)}。

しかし、駐在員妻の居場所は初めからスムーズにみつけれられるわけではない。赴任地に到着し、日本から送った家財道具の落置き場所を見つけ、子供の学校生活が無事に滑り出し、家族の日常生活の再構築が軌道に乗って初めて駐在員妻たちは自分の居場所を探し始める。アジア、欧州、米国に駐在した日本人駐在員妻 20 名の家庭生活再構築プロセスについて聞き取りをした高丸は、「日常生活の再構築」は半年くらいで何らかの解決を見出す、自己としての存在できる居場所を創出する「自分の世界の創出」は容易ではなく、解決を見いだせないまま帰国する人もいると論じている⁶³⁾。

4.1 日本人コミュニティ

本研究の協力者 7 人のうち 6 人は米国駐在前にも海外駐在を経験しており、海外における居場所の大事さを理解し、米国駐在中 7 人全員が「居場所を見つける」ことに成功している。外国での居場所探しには、言葉と性格が大きな要因になる。言葉が壁と感じる人にとって米国人と無理に交流しようとするのは、ストレスになる。Gさんは、趣味を通して日本人コミュニティと活発に関わることで米国駐在中全くストレスを感じないで済んだ。「趣味を通して日本人の友達と出会えて、楽しく過ごせた．．．（中略）．．．その人たちとは帰国した今でも繋がっている。外国で苦労した愚痴なんかは、外国で同じ苦労した人と話し合える」。帰国した後も、海外で似たような経験をした人々が集い、共感し合えることは、帰国後の新たな居場所になる。Eさんは、日本人コミュニティに救われた一人である。外国でストレスから病気になった時も、子供が学校で無理をしすぎて悶々としているのを母として見ているのが辛かった時も、支えてくれたのは日本人の駐在員妻であった。日本から離れた土地で同じ境遇にいる日本人女性と集い、日本語で話し、趣味を通して楽しい時間を共有することは心理支援の役割を果たし、外国生活を肯定的に捉える言動に繋がったと考えられる。

4.2 多国籍コミュニティ

外国で日本人コミュニティの中で交友関係を構築することには負の結果を招くこともあると、小林・明田は警鐘を鳴らす⁶⁰⁾。駐在員の平均任期は3、4年で、せっかく出来た友達が離れていってしまうからである。マニラの日本人駐在員配偶者を対象にした調査でも、「帰国がある為、友人関係を継続していくことは困難」と、日本人社会で友人関係を構築する難しさが報告されている^{同上)}。Aさんも、滞在国で仲良くしていた日本人の友人が帰国してしまった時はしばらく落ち込んだ。その後、Aさんは世界のどこへ行っても国籍や言語を必要としない陶芸に行き着く。「この先世界のどこに行っても陶芸なら通じて考えたの。居場所を見つけた！って感じ」と、Aさんは語った。Cさんの場合、日本人がいない田舎町で心惹かれたのは、ズンバという踊りだった。陶芸にしてもダンスにしても、海外に駐在する配偶者にとって心を癒すアート・セラピーの役割を果たしてきたことが考えられる。

米国行きが決まった時から「米国人の友達をつくる」と決意していたFさんは、子供を通した米国人のプレイ・グループに居場所を見つけ、帰国後も米国人ママ友と交流を続けている。プレイ・グループのメンバーの大部分は白人だったが、黒人もいた。元々国際政治に関心があったFさんは、米国で香港、台湾、ブラジル人の友達を得、米国に住む人々の多様性を実感した。さらにアメリカ人は信仰心が強く、エスニシティだけではなく、宗教で固まることに興味を持ち、互いの宗教に敬意を払うことに感心したと語った。「米国社会の仕組みを知りたい」という知的好奇心が異文化受容の促進力となり、Fさんに米国人と交流する道を選ばせた。

4.3 分離と同化

日本人コミュニティに居場所を得た人々は、Berryが「分離」と呼ぶ、「自文化を維持し、滞在国文化との接触を積極的に回避する」人々のカテゴリーに属す²⁰⁾。又、米国人コミュニティに居場所を得た人は、Berryが「同化」と呼び、「自文化を捨てて、滞在国

の文化に適応する」人々のカテゴリーに属す^{同上}。しかし、本研究する協力者の語りから筆者が得たのは、異文化受容は簡単に測れるものではなく、ましてや「分離・同化・統合・疎外化」の4つのうち一つに平易に分離することは、異文化接触者をステレオタイプ化する過ちにつながるという結論である。

5. ステージ5 帰国後・夫の定年後

研究協力者の多くは、ライフ・サイクルの「老年期」の課題、「自己統合性 vs 絶望」に直面している。ステージ5の課題を「帰国後・夫の定年後・老年期」に設定したのは、夫が海外駐在員という役職から離れ、妻も駐在員妻という縛りから解放され、自由な感想が語れると考えたからである。そこに至るまでの各ステージで獲得したものをどのように振り返り、海外駐在経験をポジティブに受け入れているのか、あるいは米国駐在を後悔しているかなどの思いを聴き取ることを目的とし、「日米それぞれの特徴」「米国の良いところ」「日本の良いところ」を自由に語ってもらった。

米国の良いところで最も多く挙げられたのは、「多様性」という言葉であった。米国は移民の子孫で成り立っており、自分の祖先も他の国からの移民であり、その際米国の先達に迎えられた。従って、自分より後から米国にやってくる移民に対してもドアを開け、「自分と異なっている人を受け入れよう」という意識が歴史的背景としてあり、学校では「ユニークであれ」と教える。「人と同じことができること」に価値観を置く日本とは異なる点である。

自分で選択することは、外国での生活を受け入れる力になる。米国に行ったことで大きな変化をしたCさんに、筆者が「選択、決意、選択を繰り返しているように感じます」と言うと、「いいえ、違います。選択に良いも悪いもありません。選択して、悪いと思うから失敗になる。選択して、良くしようとするのが自分の責任だと考えています。私の場合、選択より行動です。まずは『やってみないとわからないじゃない』と行動しちゃいま

す。見切り発進の習慣がついて、やってみたら『できる!』という自信ができました」と、自ら選択したことがモチベーションを高めたことを語った。

5.1 米国の良いところを取り込む

親の介護のために日本を離れることを躊躇した E さんは、米国駐在をどのように捉えているのか尋ねた。「米国に行ってよかった。日本にいたら多様性がなかったと思う。外国にいたから私は多様性を受け入れることができるようになって、広い視野が持てるようになったと思う。日本人は、型にはまっていないと受け入れられない」と語った。多様性は、他人が異なっていることを認めると共に、自分が他人と違うことを認めることでもある。E さんは、「スニーカーを買う時、日本の子供は『友達の〇〇が履いているから欲しい』って言うけど、（米国で育った）うちの子は『〇〇が履いているからダメ』って言うんです」と、米国で育った我が子の個性化に驚いた様子を語ったが、E さん自身、「他の人と違って『変』と思わなくなった」と、個性化に価値を置く考え方になっていた。夫妻関係については、かつて日本で出産した時、夫に仕事が忙しいから子育ての手伝いは出来ないと言われ、E さんは看護師の仕事を断念した。しかし、米国生活を経験した後は、世間から期待される妻役を演じるのはやめ、「夫婦お互い自立した関係にしよう」と決めた。子供に対しては、自立した大人としての子供の選択を尊重している。米国で暮らしている子供についての気持ちを尋ねると、「子供の選んだ人生だから、私は後悔がない」、「結婚してくれればいいと思うけど、それも子供自身の選択」と語り、自己と他人は互いに切り離されているという個人主義的信念を持っている様子がうかがえた。

女性が「自己主張する」能力を持つことは、日本では肯定的に捉えられない。米国留学から帰国した日本人女性が日本で戸惑うことの一つが、自分の意見を言うことは差し控えずなくてはならない「日本的コミュニケーション・スタイル」である³⁷⁾。C さんは、日本にいる時は「夫に従う、妻の鏡」であり、自己表現する方法を知らなかった。しかし、自我が確立されている米国人と交流するうちに自己表現する必要性を実感し、今は「弾けた

妻」に変わったと言う。「日本で夫の両親と同居していた12年間はすごく無理をしていたから、もう限界だった。自分が感じていることを表現する方法がわからず、爆発という形で出ていました」。米国で自由に自己表現する能力を身につけたCさんことを、Cさんの過去を知る友人は、「あなたは米国に住んだことで遺伝子のスイッチが入った」と評している。

5.2 日本の良いところを発見する

「外国で暮らしたお蔭で、日本の良いところを発見できた」という意見も、多くの人から聞かれた。Gさんは帰国してから着物の良さを発見し、今は和裁に取り組み、機会がある度着物を着て外出すると言う。Aさんの作る陶器は、茶道の影響を受けて和風のテイストが色濃く反映している。Bさんは、L国で生け花を教え、米国では日本語を教えた。米国で和紙を使ったアクセサリーを作って売り、米国人に日本語と日本料理を教えているCさんは、「米国生活が長くなるに連れ、ますます日本文化に傾倒していっている」と語った。しかし、外国で暮らす日本人の意識調査では、日本の良いところを発見する一方、「日本人の行動の仕方や考え方が、むしろ特殊であると感じた」と、日本を批判する声もあった⁶⁴。日本の良いところを発見するにせよ、日本が特殊であることに気づくにせよ、いずれも外国で暮らしたことで自文化を知り、視野が広がり、多様性を受け入れる能力を獲得している。

5.3 日米文化の特徴

研究協力者が語った「米国の良いところ」として、「自己主張、多様性、国際的な広い視野、自立、男女平等」が抽出できた。「日本の良いところ」として、「思いやり・自己主張しない謙虚さ・他人との調和に価値観を置く集団主義」が抽出できた。一方、「日本の好ましくないところ」は、「夫上位の夫妻关系・家庭内性別役割分業・自分の意思で行動するのではなく他人の期待に応えようと振る舞う行動規範」が抽出できた。こうした日

米両文化の良いところと好ましくないところを認識した上で、研究協力者は独自の日米文化のブレンドをして、「日本文化維持～日米文化統合～米国文化同化」の幅広い収束地帯へ到達していた。

第9章 総合考察

1. 葛藤の文化的・社会的・歴史的意味

長期間米国で生活した経験を持つ日本人駐在員妻から聴き取った「日本人駐在員妻の米国滞在物語」を、「家族と共に夫の米国駐在に同行する」、「子供の教育選び」、「夫からのサポート」、「自分の居場所探し」、「帰国後・夫の定年後」の5つのステージに分け、それぞれの複線径路等至性モデルを作成した。分析の結果、各ステージの課題と葛藤が浮かび上がり、葛藤は「日本文化維持と、米国文化同化のせめぎ合い」であると解釈した。

研究目的の一つが、異文化接触者が体験する葛藤の文化的・社会的・歴史的意味の解明であった。日本人米国駐在員妻が認識した日本的思考の特性として、「自己と他人は根本的に結びついているという人間関係が基礎となっている集団主義的信念」、「他者の期待に沿って振舞う行動基準」、「人情を重んじる情緒的態度」、「規範と役割を重んじる役割志向性」、「夫上位の夫妻関係」、「自分の思いを抑えたコミュニケーション・スタイル」が抽出できた。米国的特性としては、「独立した自己に基づく個人主義」、「自分の選択に沿って振舞う行動基準」、「個性と多様性の尊重」、「男女同格の夫妻関係」、「自己主張することに価値を置くコミュニケーション・スタイル」が抽出できた。

極端に異なると言っても過言ではない両文化の間でどちらを取捨するのか、研究協力者が迷い、時には苦しんだことが理解できた。悩んだ末どちらを捨て、どちらを選択するのかは、外国で過ごした年数によって推し測れるものではなく、一人一人異なることが理解できた。個々人の人格・成育史・環境など様々な変数を組み合わせれば、葛藤の数は無数に上ると考えられる。さらに、本研究の結果は、本研究協力者7人の語りから導き出したもので、他の海外駐在員妻を同じカテゴリーに入れ、同じ結果を得られるだろうと考えることは、ステレオタイプによる誤った解釈につながる。

2. 一人一人異なる滞在国文化受容のプロセス

2つ目の研究目的は、異文化環境で生活する人が、葛藤に折り合いをつけて滞在国文化受容に至るプロセスを解明することであった。研究協力者の体験過程の語りを分析した結果、7人の協力者の異文化受容プロセスは一人一人異なることを解明することが出来た。

Aさんは、外国人に対して「国境をつくらない」という信念を持ち、赴任前から異文化受容していた。赴任後は滞在国の言語を習得し、子供を現地校に通わせ、現地人の友達をつくり、また、陶器という共通言語を通して現地の人とのコミュニケーションを図るなど異文化理解の努力を重ねた。しかし、帰国してからは、日本の「空気を読む」集団主義的文化に戸惑いを感じた。

Bさんは、1つ目の駐在国で子供の教育に英語を選んだことから、子供とのコミュニケーションは英語になり、滞在国文化同化の道を歩んだ。しかし、滞在国で現地人に生け花や日本語を教える仕事に就いたことで、Bさんは日本文化維持をも続けたと言える。その後Bさんを再び米国文化同化の道に押ししたのは、米国で勤めていた大学院の上司から言われた言葉であった。「私を敵対視していないことを示したいなら、他の米国人と同じように私をファースト・ネームで呼びなさい」と言われたことがきっかけで、Bさんは日本人メンタリティを切り離す覚悟をした。自分の中に深く根付いていた日本人のメンタリティを切り離すことに初めは怖気づいたが、「何年かするうちその習慣が身についた」と言う。一度身についた「目上の人に敬意を払う」という日本の慣習を切り捨て、滞在国の慣習を身につけることは、覚悟と時間が必要であることが理解できた。仕事をリタイアした後の生活は100%英語で、滞在国文化同化に限りなく近い道を進んでいるが、日本が大好きな子や孫を連れて毎年日本を訪れるなど、日本との交流を続けている。

Cさんは、突然訪れた経済的危機に対応するため、それまで夫の言葉に「ハハー」と三つ指ついて従う「良い嫁」であったのが、米国的に自己主張する「弾ける妻」へと変身した。米国駐在の初めは日本人コミュニティの中で日本の方向を向いて生活していたが、必要に迫られ田舎町に引越し、米国社会で受け入れられるようになるに連れ、米国文化同化

の方向に転換した。「米国生活が長くなるに連れ、益々日本文化に傾倒している」と語る一方、「(いつの日か帰国することを考えると)米国社会の多様性に慣れ親しんでしまった自分が日本社会で受け入れられるかと恐々としている」とも語った。Cさんの心は、今も日米両国の間でせめぎ合っている。

Dさんは帰国子女で、結婚後も夫の仕事でヨコヨコ駐在を繰り返して、人生の半分以上を外国で暮らした。しかし、日本文化維持の信念を持ち続け、「自分も夫も日本人だから」、「義務教育は日本語で」と、子供には日本語教育を選んだ。その後、海外駐在が長期化し、子供の年齢が上がるに連れ、周囲の状況に合わせて自分の信念を柔軟に変えていった。夫妻関係では、海外駐在中は「夫のゴルフは仕事の一部」、「夫は子育てしない世代」、「家族を守る、子供を育てるのは私の仕事だと割り切って、誇りを持っています」と、「他者の期待に沿って振舞う行動基準・規範と役割を重んじる役割志向性・夫上位の夫妻関係」といった日本的な性別役割分担を維持したが、帰国後は「うちの夫はバーベキューをよくやるの。あれは外国生活の影響ですよ」、「海外で知り合った日本人と夫婦単位でのお付き合いすることがとても嬉しいです。もし夫婦で別行動が多い日本でずっと過ごしていたらこんなことはなかったらと思うと、アメリカで生活できたことが本当に良かったと思います」と、夫妻で行動を共にする米国的夫妻関係を楽しんでいる。

Eさんは、英語が得意でない、以前の海外駐在でストレスから病気になった経験がある、介護を必要とする親を置いて外国に行きたくないなどを理由に、米国赴任に消極的だった。米国滞在中は、日本人の友人と交流し、主に米国内の日本人社会の中で生活していた。しかし、インタビューで米国生活を振り返るうちに、自分が米国文化を受容していたことに気が付いていった。夫妻関係については、「日本人には、夫は妻より上という感覚が大いにありますよね。だけど、米国から帰ってからは、夫婦はお互い自立している関係と考えるようになりました」と語った。多様性については、「日本には、周囲に同調するのが美德のような感覚ってありますよね。昔の私なら世間体を気にしていたかもしれないけど、今は人と違うと変という感覚はなくなりました」、「外国にいたから、広い視野が

持てるようになって、多様性を受け入れることができるようになったと思う。海外に行っ
てよかったと思う」と、米国の価値観を受容している様子が伺えた。

Fさんは大学で国際政治を学んだ経験から、米国に憧れ、米国駐在をチャンスと捉え
た。赴任前から「米国人の友達をつくる」と決意し、米国滞在中は子供を通して米国人グ
ループと交流し、米国文化を大いに受容した。しかし、帰国後は、子供は普通の日本人と
して育てたいと考え、日本語の教育に徹し、日本文化維持の道を進んだ。

Gさんは、「英語が得意じゃないし、米国人の家族と親しく付き合う性格じゃない」
と、米国滞在中は趣味を通して日本人の友人をつくり、そのお蔭で「全然ストレスがなく
て、楽しかった」と語った。帰国後も着物づくりを通じた仲間を得、機会がある度着物を
着て外出し、一貫して日本文化維持を貫いているように見える。しかし、米国人と結婚し
米国で暮らしている2人の子供と孫を通し、今は駐在員妻の頃とは異なる方向から米国を
眺め、米国社会を理解し、受容している様子が伺えた。

以上の分析結果から、研究協力者の異文化受容プロセスは7人7様であるという結論に
達した。どの時期に、どちらの方に傾くかは一人一人異なり、統一モデルはない。Oberg
のU字カーブモデルは、本研究協力者には該当しなかった。

3. 日米文化の融合地帯

7人の研究協力者の間で共通点を2つ抽出した。1つ目は、全員が葛藤に遭遇する度に
折り合いをつけ、周囲の状況に合わせて柔軟に自分を変化させ、その工程を繰り返すこと
で多様性を身につけていったことである。2つ目は、外国で暮らす間は日本文化維持と米
国文化受容の間でせめぎ合っていたが、インタビューの時点では全員が【日本文化維持～
日米文化統合～米国文化同化】という幅の広い収束地帯に到達していたことである。「日
本文化維持」「日米文化統合」「米国文化同化」の間に明らかな境界線はなく、3つが融
合する「集合地帯」である。

インタビューを通して、自文化を捨てることは時には罪悪感が伴い、さらに外国にいな
 がら自文化を維持することは、周囲に溶け込めない苦しさを伴うことを理解できた。又、
 幼い頃に一度身につけた自文化・自国の価値観を捨てることは容易ではなく、覚悟と長い
 時間が必要であることも解明できた。

日本人米国駐在員妻の異文化受容のプロセスを図8に示した。

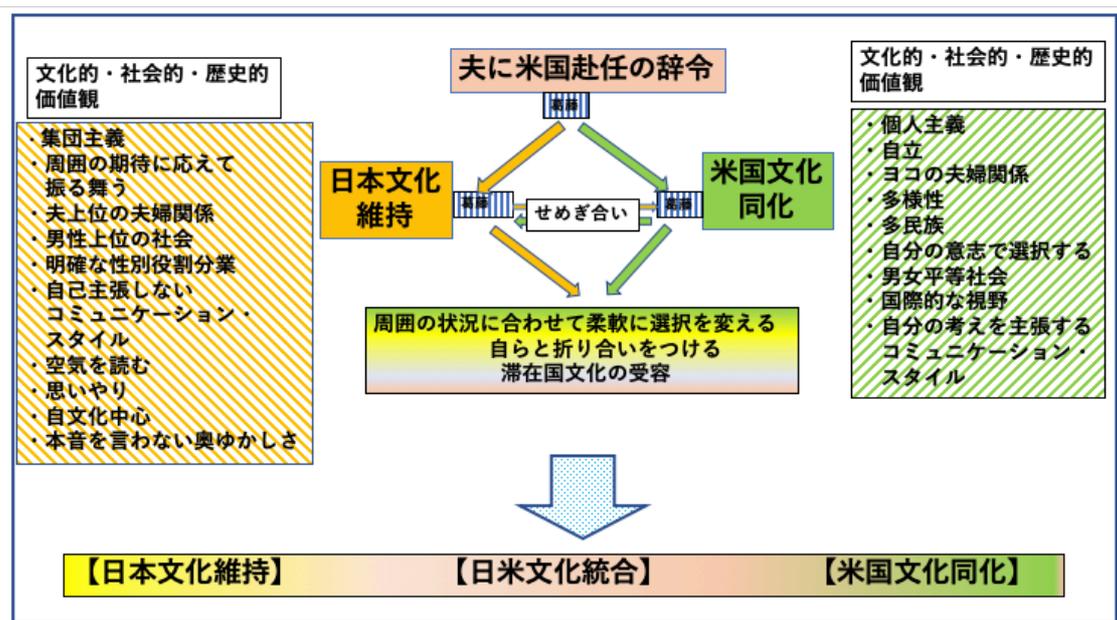


図 8 日本人米国駐在員妻の異文化受容プロセス

第10章 結語

「クライアントの文化的世界観を認識し、多文化に配慮した心理支援を提供するには、どうしたらよいか」というリサーチ・クエスチョンに始まり、異文化接触者が滞在国で遭遇する葛藤の文化的・社会的・歴史的意味を文化心理学の視座から考察した。本研究の協力者は米国駐在中、自国文化維持を選択するか、米国文化受容の選択肢の間で葛藤したが、米国滞在中身につけた多様性と、必要に応じて選択を変更する柔軟性を発揮し、最後は全員が【日本文化維持～日米文化統合～米国文化同化】という幅の広い収束地に到達していた。

Berry は、個人が受け入れ集団に向かって文化変容する際経験するストレス・レベルは、心理的・文化適応レベルにより「統合・同化・分離・疎外化」の4つの文化変容戦略に分類したが²⁰⁾、本研究では、長期的に米国文化に接触した協力者が到達した等至点は【日本文化維持～日米文化統合～米国文化同化】という集合地帯であった。「維持・統合・同化」の間には明らかな境界線がない点は、Berry の文化戦略と異なる。時間の経過とともに、そして周囲の状況に合わせて、本研究協力者は「維持・統合・同化」の間を、時には必要に迫られ、時には葛藤しながら揺れ動いた。本研究協力者の中には「疎外化」に該当する人はいなかった。

Oberg は異文化接触者が異文化に適応していく過程を、「ハネムーン期・カルチャー・ショック期・回復期・安定期」のU字カーブモデルで表したが²³⁾、本研究では、異文化接触者の異文化適応プロセスは一人一人異なり、統一モデルはないという結論に達した。但し、この結論は本研究協力者である7人の駐在員妻の語りを分析して得た結果に基づいており、属性をはじめ様々な環境要素や、異なる文化的・社会的・歴史的意味を組み合わせれば、異なる結論にたどり着くと考える。

本研究の意義として、日本人米国駐在員妻の米国文化受容プロセスの多様性を明らかにすることができたことが挙げられる。米国心理学会は、心理支援者の心得るべき多文化理

解能力のガイドラインで、心理支援者がクライアントを一般化し、カテゴリー化することを戒めている⁶⁴⁾。先入観を持たず、異文化接触者の異文化受容プロセスは一人一人異なることを念頭に置くことが「多文化に配慮した心理支援」につながる。又、駐在員妻が研究対象になることが少ない産業カウンセリングの分野や、海外に社員の家族を派遣する会社人事担当者に対して、長期間外国に駐在する配偶者の抱える葛藤を理解し、必要な支援を提供する手がかりを提示できたと考える。さらに、過去の異文化適応に関する研究では主に量的研究が用いられ、適応・不適応の要因を調査することに重みが置かれていたが、本研究では数字に表れない当事者の声を聴き、その意味を読み解くことが出来たと考える。最後に、日本人米国駐在員妻が、滞在国で体験する文化的葛藤と折り合いをつけ、滞在国文化を受容するプロセスを文化心理学の視座から分析したことは、意義があると考えられる。クライアントの文化的世界観を理解するには、心と文化は相互構成であるという認識を持つことが重要である。

限界も見えた。本研究の協力者の選定基準の一つに、「米国 New Jersey 州または New York 州に 5 年以上住んでいる」ことを挙げたが、米国駐在前に他の国に駐在した経験のない協力者は 7 人中 1 人だけであった。本研究の結果が、米国に駐在した経験に依るものか、他の国に駐在した経験が影響しているのか、明らかにすることは出来なかった。今後はその点を明確に分けて研究する必要がある。また、年齢の選定基準を「子育てが終わった 50 歳以上」に設定したが、社会の価値観は毎年変わると言っても過言ではない現代社会では、年齢の相違が結果に及ぼす影響は大きいと考える。今後、様々な世代の人を対象に研究する必要がある。さらに、本研究では在留邦人数が最も多い米国¹⁶⁾を研究協力者の駐在国として選定したが、滞在国の地理的・経済的・民族的環境、異文化受容度、文化難易度などが異なれば、異なる結果が得られると考えられる。今後、米国以外の国に駐在している人々を対象に研究する必要がある。

冒頭に、多文化カウンセリングを日本の心理支援に導入する必要性を説いた。そのゴールにたどり着く為には、今後様々なアングルから問題を眺め直し、研究を積み重ねることを課題にしたい。

謝辞

研究に協力者して下さいました方々に心からお礼申し上げます。皆様が快くインタビューをお引き受け下さり、忍耐強く応じて下さいましたお蔭で、研究を遂行することが出来ました。

長きにわたり論文執筆の御指導をして下さいました亀口憲治教授、御多忙の中ご丁寧に、そして温かく審査・御指導下さいました飯長喜一郎特任教授、鹿島晴雄教授、岡村世里奈准教授に、深くお礼を申し上げます。

幾度も挫折しそうになった私を近くで支えてくれた夫・邦仁、米国から応援し続けてくれた娘・沙織と息子・慶太に、心からの「ありがとう」を伝えます。家族の応援がなければ、本研究の完遂はなかったと感じています。

本稿を終えるにあたり、本研究は多くの方々に支えられたものであると実感しております。私を応援し、研究を遂行する勇気を与えて下さった皆様、ありがとうございました。

引用文献

- 1) International Labor Organization. 2015. New ILO figures show 164 million people are migrant workers.
https://www.ilo.org/wcmsp5/groups/public/@dgreports/@dcomm/documents/publication/wcms_436343.pdf 2019.06.22
- 2) The UN Refugee Agency 日本. 2017. 数字で見る難民情勢.
https://www.unhcr.org/jp/global_trends_2017 2019.08.15
- 3) US Census Bureau. 2018. Race.
<https://www.census.gov/topics/population/race/data/tables.html> 2019.08.10
- 4) NHK. 2016. アメリカの総人口における人種の割合.
https://www.nhk.or.jp/syakai/10min_tiri/shiryou/pdf/006/shiryou_002.pdf 2019.08.13
- 5) American Psychological Association. 2018.
<https://www.apa.org/monitor/2018/02/datapoint> 2019/08/09
- 6) Sandra Tomlinson-Clarke. Multicultural counseling competencies: extending multicultural training paradigms toward globalization. ACA Professional Information/ Library. 2013;1-10.
<https://www.counseling.org/docs/default-source/vistas/multicultural-counseling-competencies.pdf?sfvrsn=7> 2019.08.11
- 7) Sue DW, Arredondo P, McDavis RJ. Multicultural counseling competencies and standards: A call to the profession. Journal of Counseling & Development. 1992; 70(4): 477-486.
- 8) American Psychological Association. 2017. Ethical principles of psychologists and code of conduct. apa.org. 2019.06.22.
- 9) Sue S. In search of cultural competence in psychotherapy and counseling. American Psychologist. 1998; 53(4): 440-448.

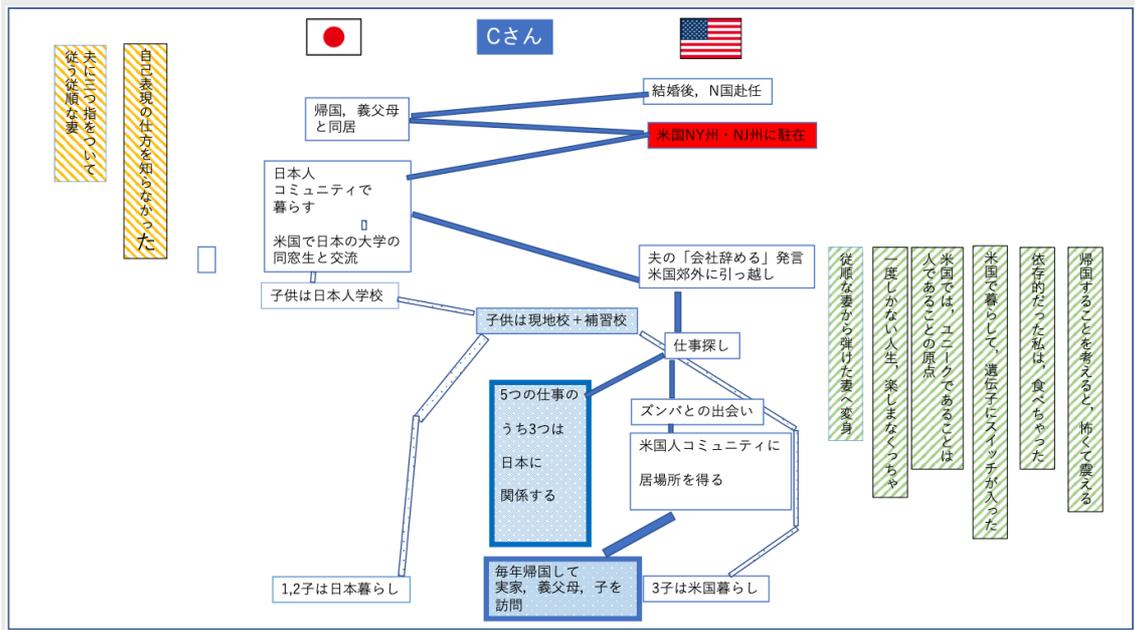
- 10) Whaley AL, Davis KE. Cultural competence and evidence-based practice in mental health services. *American Psychologist*. 2007; 62(6): 563-574
- 11) 藤岡勲. 「心理臨床学研究」における民族的マイノリティを対象とした研究活動. *心理臨床科学* 2014; 4(1): 13-23
- 12) 厚生労働省. 2018. 外国人労働者雇用状況の届出状況まとめ.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/jigyounushi/page11.html 2019.08.14
- 13) 法務省入管管理局. 2018. 難民認定者数等について.
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri03_00700.html.
2019.08.12
- 14) 文部科学省. 2008. 留学生 30 万人計画骨子.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/07/08080109.htm 2019.08.10
- 15) 総務省. 2018. 住民基本台帳に基づく人口動態及び世帯数.
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html
2019.08.09
- 16) 外務省. 2017. 海外在留邦人数調査統計平成 30 年度要約版
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf> 2019.08.16
- 17) 一般社団法人. 臨床心理会倫理綱領.
http://www.jsccp.jp/about/pdf/sta_5_rinrikoryo0904.pdf 2019.08.10
- 18) Erby AN. 2017. EDCE6860: Multicultural counseling. Department of counseling and higher education, Ohio University. <https://www.ohio.edu/instructional-innovation/stories/showcase/showcase-files/EDCE%206860%20Syllabus%20F17.pdf>
2019.08.16
- 19) Redfield R, Linton R, Herskovits MJ. Memorandum for acculturation. *American Anthropologist*. 1936; 38:149-152

- 20) Berry JW. Acculturation: Living successfully in two cultures. *International Journal of Intercultural Relations*. 2005; 29: 697-712
- 21) Church AT. Sojourner adjustment. *Psychological Bulletin*, 1982; 91(3): 540-572
- 22) 大西晶子. 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビューー文化的アイデンティティ研究を中心にー. *教育研究科紀要* 2001; 41: 301-310
- 23) Oberg K. Culture shock: adjustment to new cultural environments. *Practical Anthropology*. 1960; 7: 177-182
- 24) 北山忍. 文化心理学とは何か. [柏木恵子, 北山忍, 東洋編]. *心理学と文化のかかわりー歴史の中からー*. 文化心理学: 理論と実証. 東京: 東京大学出版, 1997: 17-43
- 25) 北山忍, 宮本百合. 文化心理学の洋の東西の巨視的比較ー現代的意義と実証的知見ー. *心理学評論* 2000; 43(1): 57-81
- 26) 北山忍. 自己と感情ー文化心理学による問いかけ. *認知科学モノグラフ* 9. 東京: 共立出版株式会社, 1998:1-73
- 27) Markus RL, Kitayama S. Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*. 1991; 98(2): 224-253
- 28) トリアンデイス HC. [神山貴弥, 藤原武弘編訳]. *個人主義と集団主義ー2つのレンズを通して読み解く文化ー*. 京都: 北大路書房, 2002
- 29) マツモト D. [南雅彦, 佐藤公代監訳]. *文化と心理学ー比較文化心理学入門ー*. 京都: 北大路書房, 2001: 20-82
- 30) ホフステード G, ホフステード GJ, ミンコフ M. [岩井八郎, 岩井紀子訳]. *多文化世界ー違いを学び未来への道を探るー*. 第3版, 東京: 有斐閣, 1995: 81-173
- 31) 大西守. 異文化ストレス症候群ー人はなぜ異国で病むのか: カルチャーショックを克服するには. 東京: バベル・プレス, 1992: 10-169

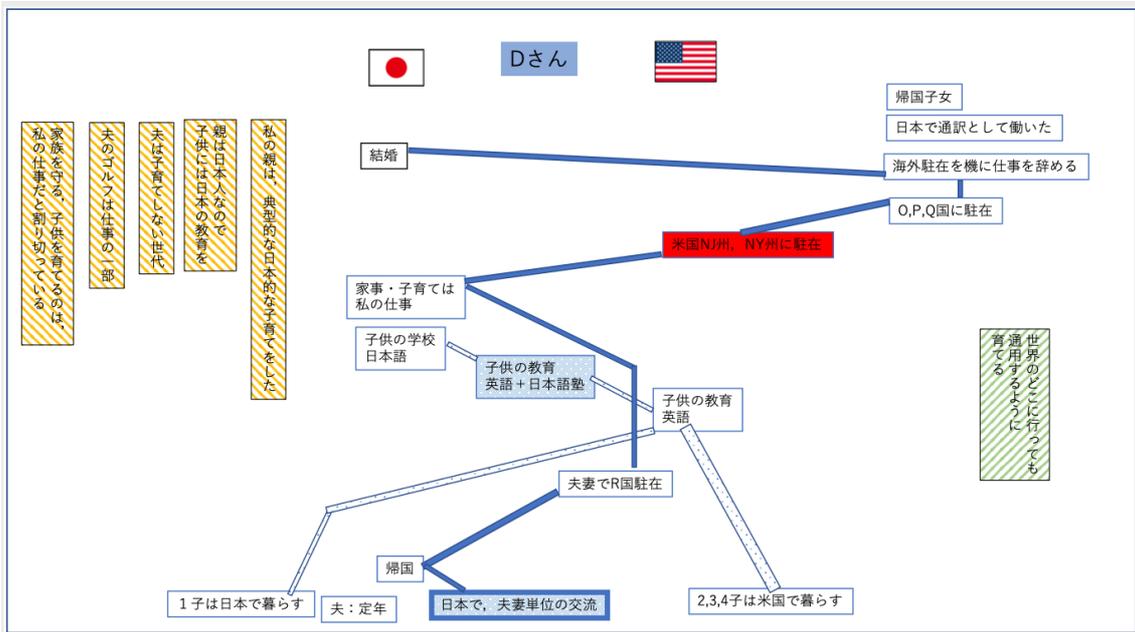
- 32) 田村毅. 海外駐在員とその家族の精神衛生の諸問題—事例研究—. 日本社会精神医学雑誌 1993; 1(1): 116-116
- 33) 津久井要. 海外勤務者およびその家族のメンタル・ヘルス. 心身医学会 1996; 36(1): 175-182.
- 34) Tung RL. Selection and training procedures of U.S., European, and Japanese multinationals. California Management Review. 1982; 25 (1): 73-85
- 35) 三善勝代. 夫の海外転勤に同行する. 転勤と既婚女性のキャリア形成. 東京: 白桃書房, 2011: 136-178
- 36) Adler NJ. Re-entry: Managing cross-cultural transitions. Group & Organization Management. 1981; 6(3): 341-356
- 37) 長谷川典子. 逆カルチャー・ショックの思考的研究—米国からの帰国女性—. 北星論集 2000; 37: 71-81
- 38) 田中真奈美. 海外生活がアイデンティティに与える影響—あるアメリカ在住日本人の経験を通しての考察—. 研究紀要 2008; 1: 89-99
- 39) 皆川久仁子. 家族イメージ図を通してみる文化変容—日本人米国駐在員妻の場合—. こころと文化 2020; 19(1)
- 40) 亀口憲治. FIT (家族イメージ法) マニュアル. 東京: システムパブリカ, 2003
- 41) Berry JW. Acculturation: Living successfully in two cultures. International Journal of Intercultural Relations. 2005; 29: 697-712
- 42) Mendenhall M, Oddou G. The dimensions of expatriate acculturation: A review. Academy of Management Review. 1985; 10(1): 39-47
- 43) 秋山剛. 異文化間メンタルヘルスの現在, こころと科学 1998; 77: 14-22
- 44) Kuczynski L, Navara GS, Boiger M. [Chuang S, Moreno R, ed.] The social relational perspective on family acculturation. Immigrant Children: Change, Adaptation, and Cultural Transformation. Plymouth: Lexington Books. 2011: 171-191

- 45) 安田裕子, サトウタツヤ, ヴァルシナール Jら. 複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究 2006; (5): 255-275
- 46) やまだようこ. [やまだようこ, サトウタツヤ, 能智正博ら編] 質的心理学の核心. 質的心理学ハンドブック. 東京:新曜社, 2013: 4-23
- 47) Bruner J. Acts of meaning. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1990: 13-94
- 48) 森岡正芳. [やまだようこ, サトウタツヤ, 能智正博ら編]. ナラティブとは. 質的心理学ハンドブック. 東京:新曜社, 2013: 276-293
- 49) 徳田治子. [やまだようこ, サトウタツヤ, 能智正博ら編]. インタビューの方法. 質的心理学ハンドブック. 東京:新曜社, 2013: 307-323
- 50) 川島大輔. [やまだようこ, サトウタツヤ, 能智正博ら編]. インタビューの概念. 質的心理学ハンドブック. 東京:新曜社, 2013: 294-306
- 51) 能智正博. [やまだようこ, サトウタツヤ, 能智正博ら編]. ナラティブ・テキストの分析. 質的心理学ハンドブック. 東京:新曜社, 2013: 330
- 52) 上別府圭子, 福澤利江子. 複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA). 家族看護学研究 2018; 24(1): 123-125
- 53) 箕浦康子. 子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究—. 増補改訂版. 東京:新思索社, 2003: 105-125
- 54) Black, JW, HB Gregersen. The other half of the picture: antecedents of spouse cross-cultural adjustment. Journal of International Business Studies. 1991; 22(3): 461-477
- 55) Takeuchi R. Antecedents of expatriate spouse adjustment: an analysis of Japanese spouses in the United States. Journal of Applied Psychology. 2010; 87(4): 655-666.
- 56) 上野千鶴子. 近代家族の成立と終焉. 東京:岩波書店, 1994: 303-324

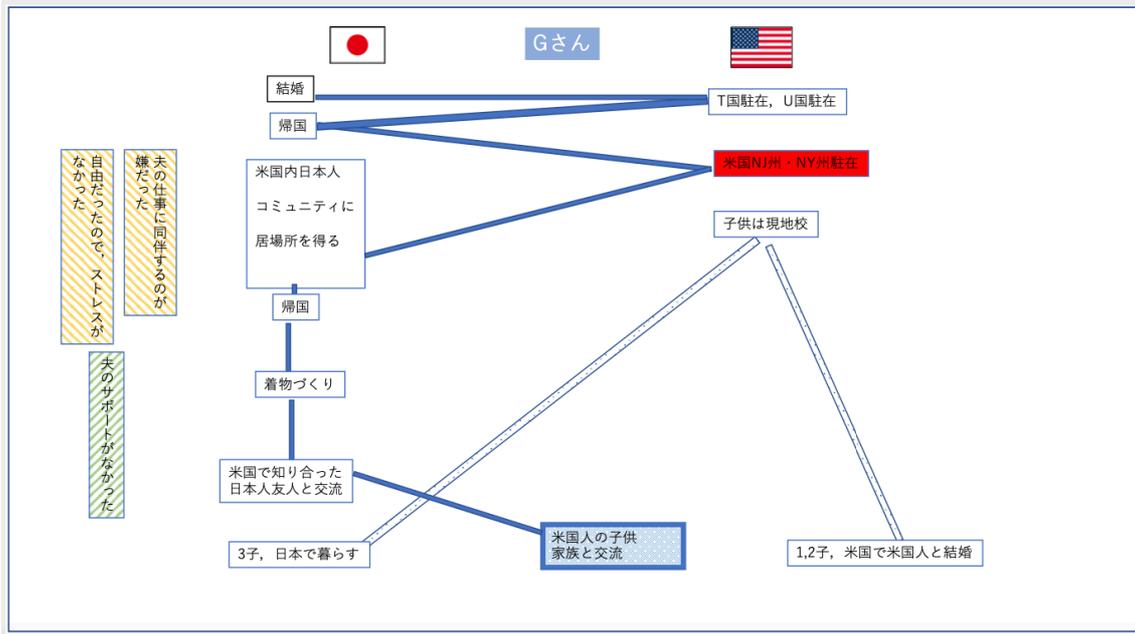
- 57) 厚生労働省. 2015. 専業主婦世帯と共働き世帯の推移.
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11201000-Roudoukijunkyoukou-Soumuka/0000118655.pdf>, 2019.08.20
- 58) 総務局統計局. 2017. 社会生活基本調査—生活時間に関する結果.
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou2.pdf> 2019.08.20
- 59) 内閣府. 2017. 夫の協力: 6歳未満の子供を持つ夫の家事・育児関連時間.
<https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html> 2019.06.22
- 60) 小林由美, 明田芳久. 海外駐在員配偶者のメンタルヘルスと自由記述にみられる生活満足・不満足経験—マニラ駐在員配偶者と国内転勤者の比較から. 臨床心理研究 心理学年報 2003;27: 19-30
- 61) 佐藤良子. 海外駐在員妻のソーシャル・サポートに関する一考察—ソーシャル・ネットワークの異文化適応促進仮説の視点から—. ころと文化 2002;1(1): 182-183
- 62) Herleman HA, Britt TW, Hashima PY. Ibasho and the adjustment, satisfaction, and well-being of expatriate spouses. *International Journal of Intercultural Relations*. 2008; 32(3): 282-299
- 63) 高丸理香. 海外駐在員家族の家庭生活再構築プロセス: 帯同配偶者に注目して. 家庭教育研究所紀要 2014; 36: 61-71
- 64) American Psychological Association. 2018. Guidelines for providers of psychological services to ethnic, linguistic, and culturally diverse populations.
<https://www.apa.org/pi/oema/resources/policy/provider-guidelines> 2019.09.01



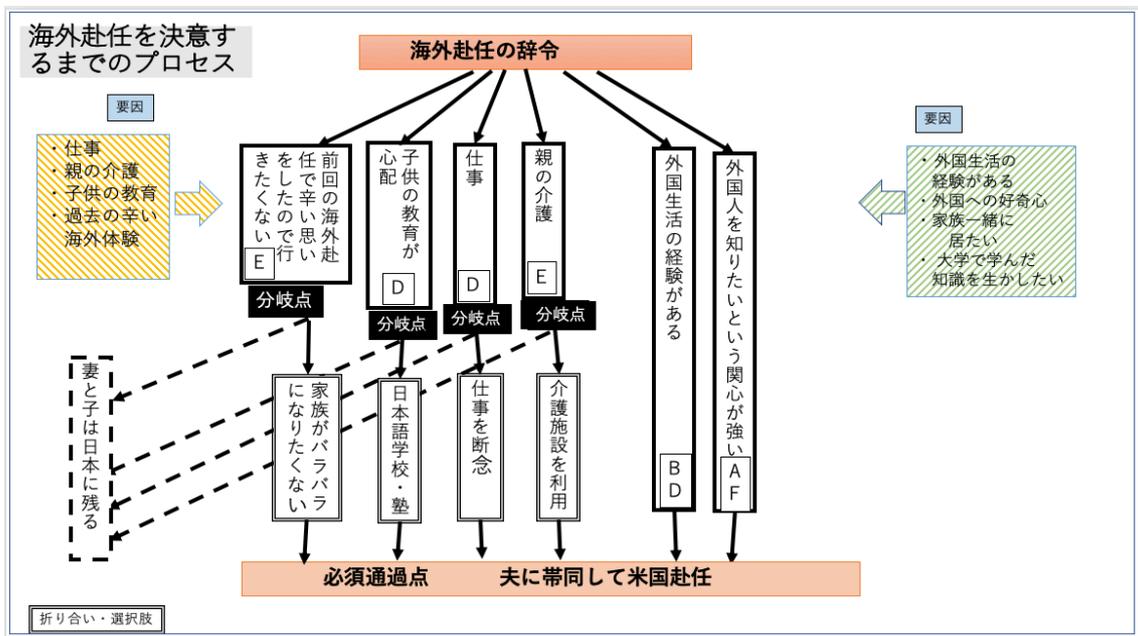
参照図3 Cさんのライフライン



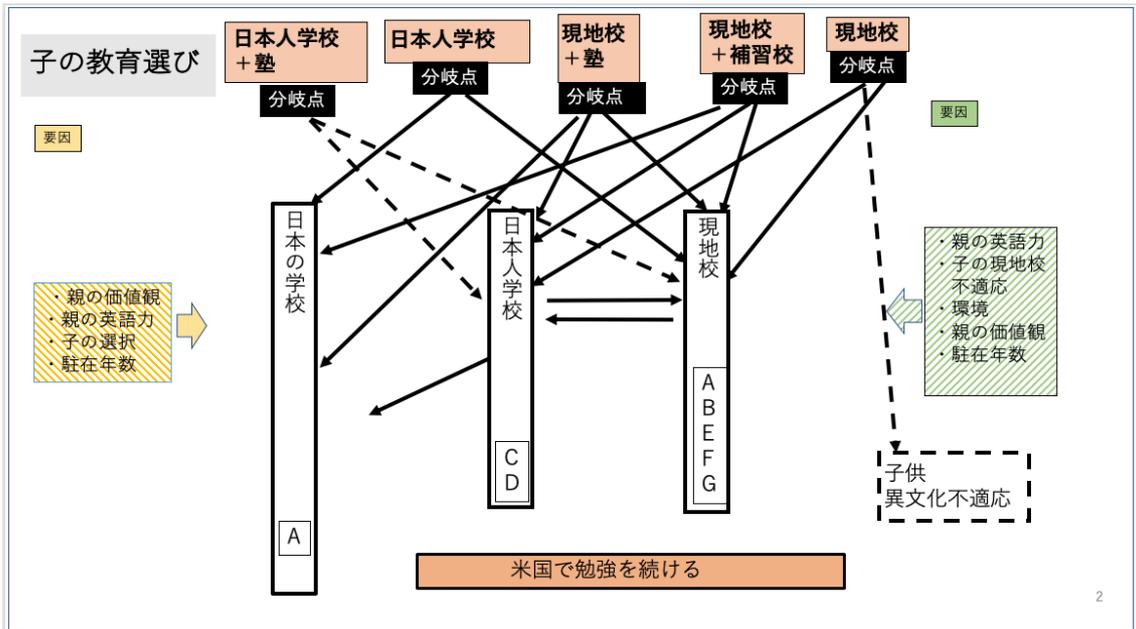
参照図4 Dさんのライフライン



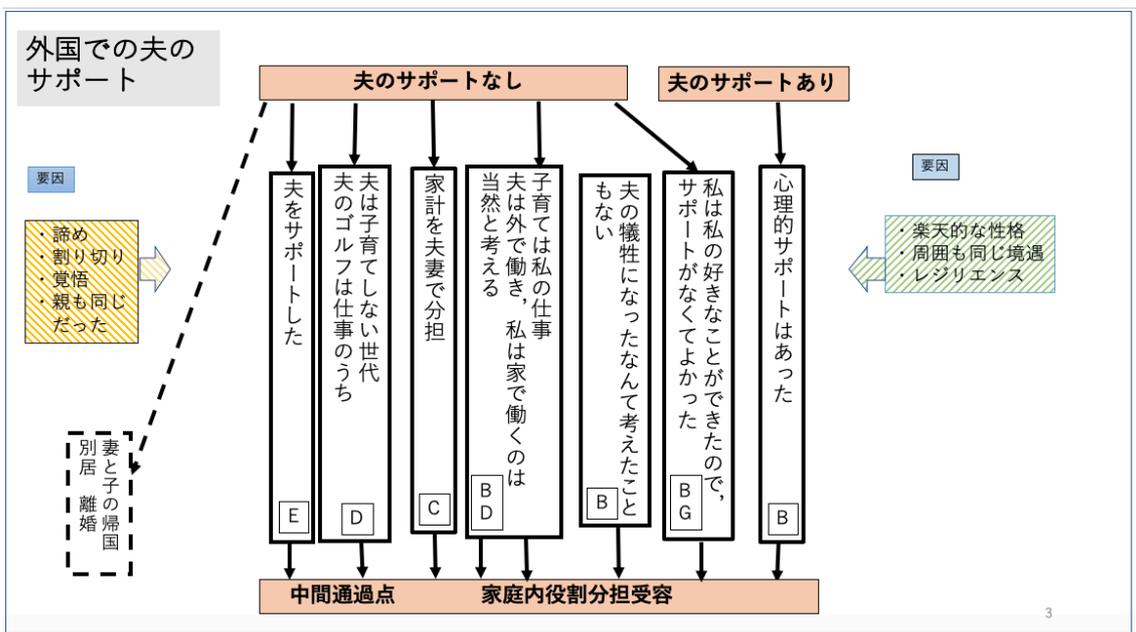
参照図7 Gさんのライフライン



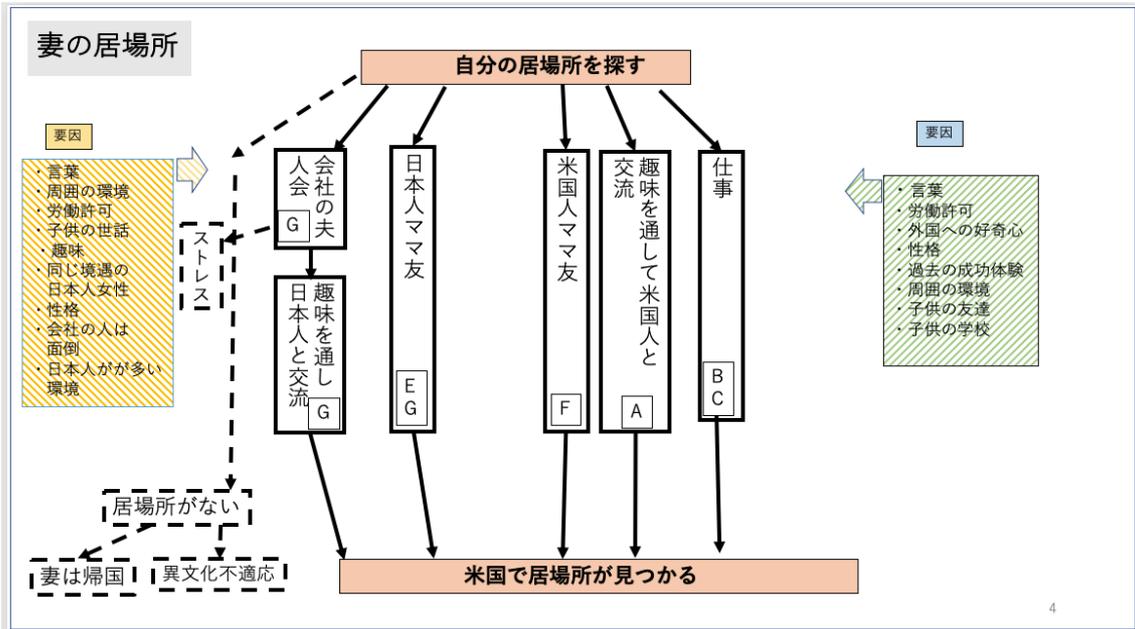
参照図8 TEM 図案ステージ1



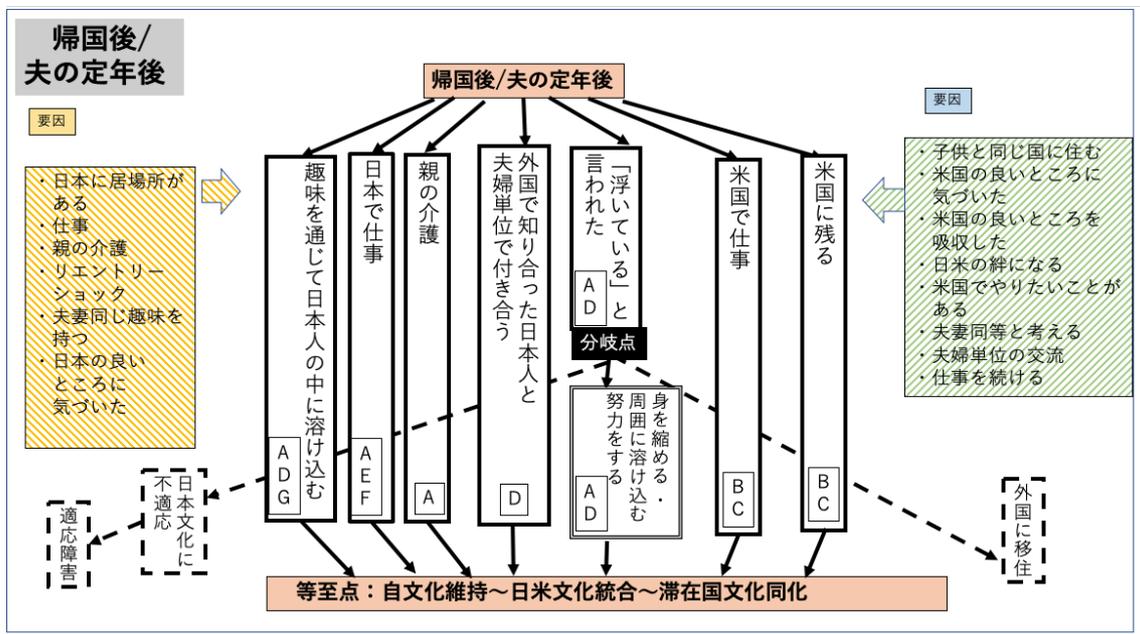
参照図 9 TEM 図案ステージ 2



参照図 10 TEM 図案ステージ 3



参照図 11 TEM 図案ステージ 4



参照図 12 TEM 図案ステージ 5